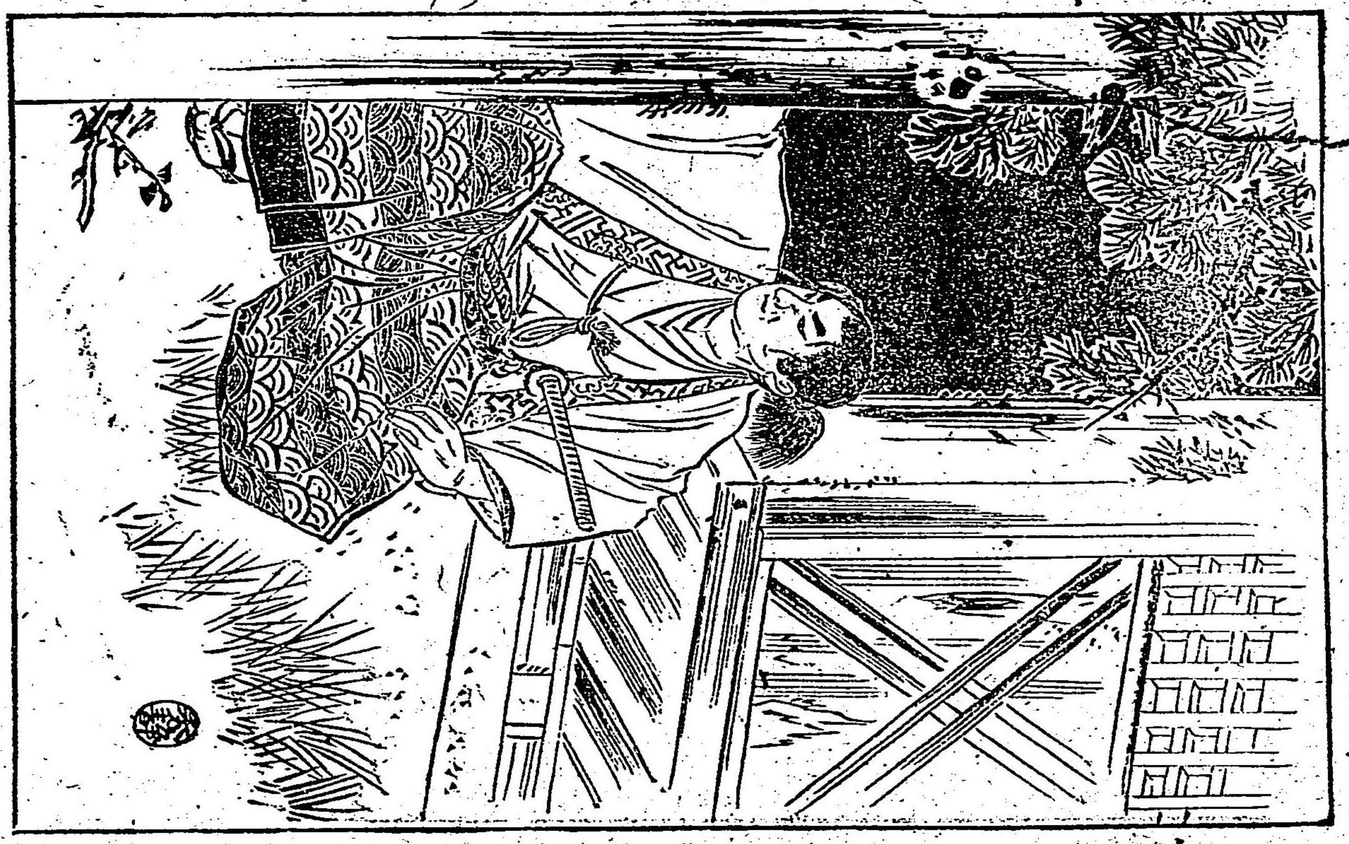
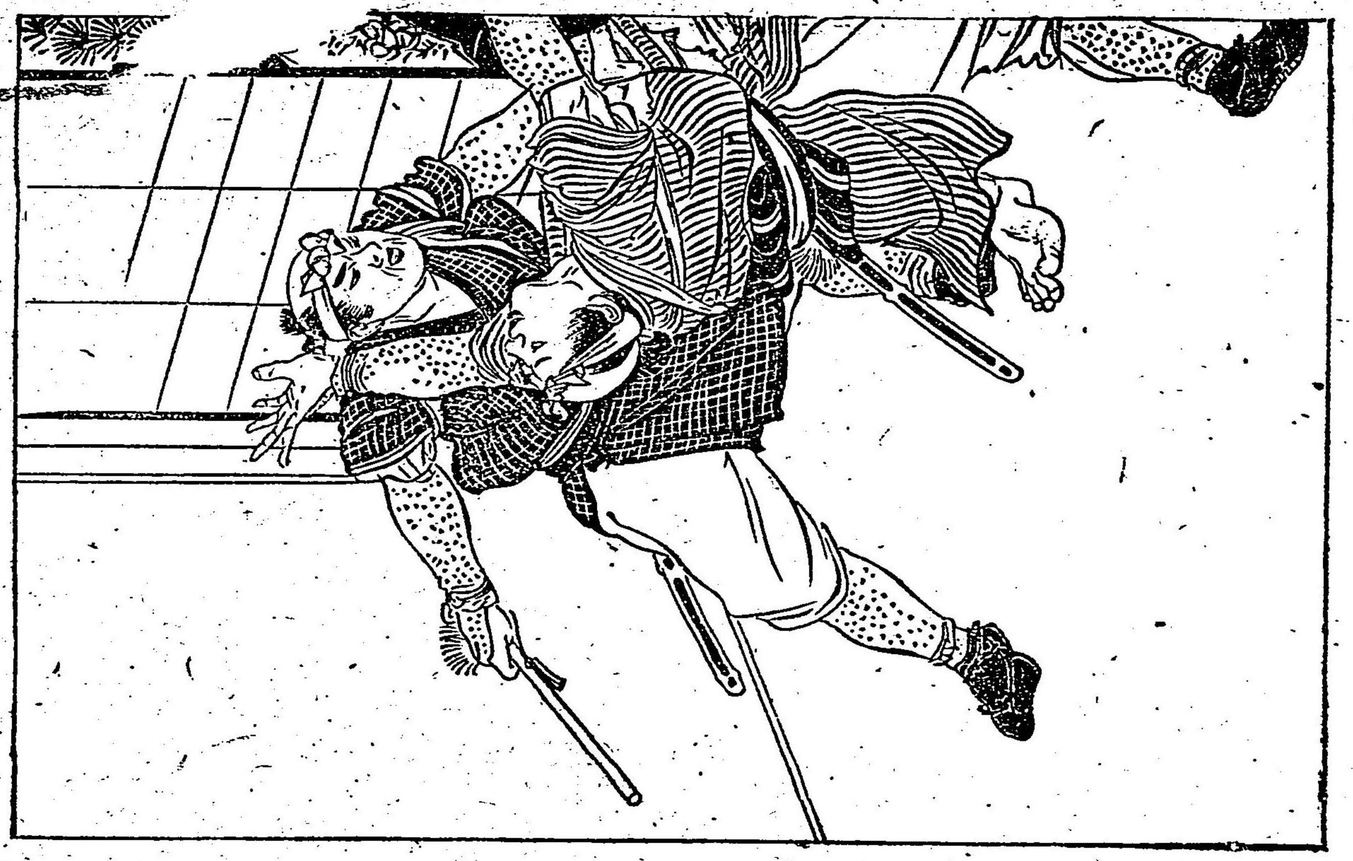
田井九橋翁之傳
東京 博盛堂發行

はしがき

由井丸橋と云へば、慶安年間に於ける、德川政事の舞台を、轉覆せんとする大膽者なる事を知るべし、抑も、當時天下漸く靜謐ならんとして、將軍の武威振はれんとするの時なれば、有司の驚き大方ならず、然れども、事未發に防禦せられしを以て、僅かに捕吏の力にて、鎭撫する事を得たり、之れ天下の幸にして、正雪の爲に悲しむ可き事おれど、其勇略寬厚たりし、優に人物の頴明ありしや、知る可きなり、時に違へば、曲とおり、時に從





へば、正とある、寧ろ心情の憐れむべきものおらん歟。

明治三十三年
皐月の末

江東隠士、
天野機節誌

特8
579

由井正雪 丸橋忠彌 兩雄傳

神田伯林講演
速記社々員速記

第一席

此度講演致しますは由井正雪丸橋忠彌両雄の傳記で御座います尤も事の起りと申せば正雪が根本でありますから最初に由井正雪を伺ひまして追々と両士の傳に積ります抑正雪の素性を尋ぬると父は吉岡治右衛門と云て染物商である弟に治郎と云のがあつて之にも染物の業を手傳はせて置たが最初は尾州の百姓であつたけれど身代を殖増るにやア商法に限るといふ處より今では大坂へ出て天滿橋の傍へ立派な店を出して居る當時吉岡染と云たら中々評判が高く時の關白殿下豊臣太閤秀吉の御用をも勤め

て居る故、追々實入りも寄くなつて來てマツ自分の思ふ半分位の望は足りて居る或日の弟の治郎は見世へ出て頻りに何か染めて居たが糊の上へ蠅が澤山群つて居る　治「エヽ穢ねいな臭いものにやア蠅が群るつていが何して此樣に寄つて來やがるんだら……」と糊筥をもつて戯談半分に打いたところ一ッとして過つことがない治郎は思はず興に入つて　治「何たい此蠅は何匹來やがつたつて此樣もんだソラ又一匹來やがつた……ーッコイシヨ……エハヽヽ又頭が落ちたかい面白い……」と云ひ乍ら飛で來る奴を糊筥で打つては落して居る實に其手練と云ふものは不思議な位だ、治郎は四邊に落ちて居た蠅の死骸を見て何か思ふところがあつたか獨り心に點首き之からと云ふものは更らに商買に身を入れない　治右「治郎お前は如何したもんだ今迄は誰よりも商買を勵んで居たものが急に此頃では怠惰ものでさ世間になると居眠りをして居て夜は元氣の宜と云ふのが一体お前は如何いふ精神なんだ外に何か望みでもあるといふのでおろそかになるのかい」物柔かに尋ねられたる治郎に於ては情ある兄の言葉に感じ乾と容態を改ため　治「兄上誠に濟みません其お尋ねにては却つて恐れ入ります何をお隠しヤましやう實は此間中より聊か武藝を心懸けまして夜分人の寢靜まつた頃よりソッと家を忍び出で天神の地内へ參り獨り劍術を勵んで居ります夫れ故ッヽ〳〵世間は居眠りもいたすやうな譯で……　治右「ウム夫じやア何か染工業は止にして是から武士にでもならうといふ心懸けだな　治「如何にも左樣でゐ座います實は此間戯れに糊筥でもつて糊に群つて居る蠅を打ちますところ一ッとして打落せないのはなく飛で來る奴は何れも頭を切つて仕舞う之と云ふのも一ッの手練とヤすもの……デ私しは考へました糊筥でさへ日々遣ひ慣れて

來れば此通り隨分蛔を打つて落せない事もない之と全しことでまい今は乱世の世の中何時戰爭が起らんとも曰はれません脆さへ出來て居りますれば出世は望み次第なもの、ソコへ私しは勘付きましたので商賈は自然身の入らぬもの兄上のお目に留つたは恐れ入りますが何卒此儀はお免しを願ひたく存じます」治右衛門と雖も夫は悪いから止と云ふ譯には往ない素より武士にでもなら云ふ心懸けは感心なものだ、ケレども之れ迄永年の間仕込んで今漸く一人前の仕事が出來ると云ふ役に立つとあろでもつで急に止られて仕舞つては實は困るんです　治右「成程お前の云ふ處も尤もだ併し之れ迄幼稚ときから此職へ身を入れ俺もお前の成人を樂んで斯して店を張て往んだものう何か夫りやア思ひ止つて貰ひたいもんだ……

治「夫れは尤もですが何か此儀は

お聞濟み下さいモシ兄上此れは私しが一生のお願ひでは座います」治右衛門も考へた是りやア飛でもない事になつて仕舞つたと　ワク〳〵思案に及ぶ　治右「那れほど治郎も劍術を熱心するもんだから快よく俺も聞濟んで遣らうか知らん今じやア斯して商賈も繁昌するし慾を言へば限のないと彼女が遊樂でも始めたところで仕方がねい夫を劍術が習つて見ていつてんだから誰が宜い師匠を取らして仕込んで見やうと終に治郎の望み通り武藝を學ぶが宜からうと云ふ事になつた　治「何も兄上有難い事で座います夫では師匠を取らして下さるんで……

治右「如何にも劍術を修める位ならば一人で立木を相手に遣つたつて始まらん咄しだ充分遣る方がお前の望みも叶うと云ふもの」之より治郎は一刀流の劍道を修め自ら吉岡兼房齋と名乘つて吉岡流と云ふ即飯着で一派開くやうに相成りました處が之が抑も吉岡家破滅の基

で余り兼房齋武術の出來ますとあろから自然と高慢になつて來て人を眼下に見下し誠に氣が荒々しく恐ろしい短氣になつた丁度三月の節會に京都禁裏に於かせられて鶏合せがある此時には府下の老若何れも拜見の出來ます事故其混雜は一通りでない雜式共は棒を取つて甲「ヤア静まれ〳〵乙「騒々しいぞ不禮なるぞ……と棒を揮つて制して居る此時治郎も群集に交つて拜見をして居たが雜式共の棒が治郎の額に當つた元來短氣な男だから堪りません塲所柄をも憚からず忽ち其棒を奪ひ取ると見る間もあらせず突然雜式等七八人をソコへ打倒しました甲「ソラ狼籍者だ出合へ〳〵……と八方より取圍いて打つて懲るをば物とも致さぬ治郎兼房齋に於ては日頃の手練を顯はし當るに任せて薙立て打たてハヤ一方を斬り破つて此塲を逃れ出でたれど如何せん既に門は閉つて仕舞ひ迚も出る事が出來ない仕方がないか

ら築塀に走り寄り身を跳らして飛び上つたが誰の武士數十人下から三間柄の槍をもつて槍玉に揚げんとする此有樣を屹度見渡し治「ヤア〳〵雜人原確かに聞け人には上下の別ありと雖相互に謙讓のあるもの拙者には何の無禮もなきに棒をもつて額に疵を被せられ何條ナメ〳〵と退くべき事の起りは汝等の粗忽にあるものを敢へて一言の挨拶も致さず直ちに擲たん抔とは非道の至りサア切るとも突くとも致して見ろ一寸の虫にも五分の魂あり乘掠敵せず今此塲に於て死するとも靈魂は再び世に歸り必ずや大なる祟を見せんイデ兼房齋が最期の働き手本に致せ」と再び刀を取直し前後より突懸る槍の穂先を踏こへ跳り越へ眞額梨割車切り秘術を盡す手練の太刀風其太刀先きに向ふ者は一人として深痍を負はぬものはない併し何を云ふにも多勢に無勢相手は入れ交り立交り新手が交代するけれど兼房は只一人の事で加

勢と云ふ者はないんですから今は力も盡き數ヶ處の手疵も受けました故、治「アヽ寧そ死ぬのならゝザ〳〵雜人原の手に懸つて死ぬのも淺念の至り一先づ此處を切り拔け潔よく自殺を致さん」と再たび築塀を跳り越ねんと致すと運の惡さや袴の紐が綴んで居たもんですから裾が忍び返しに引かゝつて眞倒逆に撞と落ちた。×「ソラ殿狂人が落ちたぞと一度にドッと槍を差し延べ肩腰のきらひなく亂槍の下に突き貫かれたので悶れむ可し兼房齋は終に此場に絶命に及んだサア此日の騷動と云つたら中々一通りでない唯今なら新聞の號外とでも云ふところですが忽ち洛中洛外に評判高く大坂にあつたる兄治右衛門も此事を耳に致すやうに相成つた。治右「夫だから最初から劍術を習ひていと云ふ時に那程止めたんだけれど聞かずに修業したもんだから終に夫れが仇となり此樣騷動を出かして仕舞つて……アヽ何したものか知らんッズ〳〵して居りやア自分の身にも祟りが來るは知れたと詰らぬ事になつて仕舞つた」と愚圖々々いたしては居られませんに依り有り金子を携へ未だ妻子のないを幸ひに逸早くも出奔して仕舞つたソコへ引違へて捕吏の役人組子を連れて出張に相成りけるが既に治右衛門は出奔して仕まつた後の事故據どころなく家藏家財は殘りなく沒收せられ吉岡屋も忽ち青竹の矢來で結まはされるやうな始末になつた其内に太閤秀吉殿下には他界に相成り引き續いて石田三成等が關ヶ原の騷動を引き起したので吉岡治右衛門は今ぞ詮議の沙汰も薄らぎしと聞き駿河國富士郡由井村へと參つたケレども平生心懸けの良き人で彼座いますに依り路金等も余り消費はなかつたので未だ金も小百兩殘つて居るスルと不圖した緣故で茶見世屋の婆さんと懇意になり色々談しをしたところが幸ひ此村に一軒明き家があつて誰れ

も住んで居ないが賣つても貸しても宜いと云ふ咄し、治右衛門に於きましては元より世を忍ぶ身の事、幸ひ、耳寄りの咄しであるから茶見世屋の婆さんに萬端周旋を頼んで當分其家を借るといふ事になつた、ケレども吉岡治右衛門と云つては大に世間を憚かる處が沙座いますに依り村の名を其儘、由井治右衛門と名乘り爰に身を落付ける事になつた　治「お婆さんやァ不圖した沙緒で段々沙世話になりトウ〳〵今では此村に落付く事が出來るやうになつたが何だらう斯うやつて居喰ひで居ちやァ堪らないから何か一ッ商賣でも始めていと思ふけれど……」茶見世屋の婆さん余程世話好きと見ゑまして萬事氣を付けて遣る夫れ故今治右衛門から相談をされて見れば默つては居られない　婆「左樣さぬい商賣と一口に云ふけれど中々商賣位ひ六ケ敷い物はありませんよ……夫れともお前さん之れ迄何か手懸けた事でもありますか

へ　治「夫りやァ無い事もないんですが何を行つても實ア損ばかりして居たんです、ケレどもねお婆さん一ッ私しの手懸けたのは染物屋だ此奴は如何やらマア物に成りそうです　婆「夫りやァ宜事を覺ねなすつた幸ひ此村には染物屋がないんで二里ッも先きの村まで往なきやァならねいんだから夫では兎も角も始めて見なすつたら如何ですね　治「お前さんが爾う仰しやつて下されば何より力になります、デは早速始める事に仕ましやうよ」と之から治右衛門は外に相談相手もないものですから茶見世屋の婆さんに萬事買物の事など聞き、合せて愈〻店を開くことに相成つたナニセヨ大坂で吉岡染と云ふ評判を取つた位の腕前ですから忽ち近所近村の評判となり由井村の染物屋は上手だ田舍には惜しいもんだと云ふやうな譯夫に茶見世屋の婆さんが來る毎のお客に吹聽する　婆「ねいマア貴女私しが世話をしたんですが此村にも

宜い染物屋が出來ましたよ何しろ此間店を出したばかり家ころ小さいが今じやア五里十里位ひの先きから馬に負て染物を遣ず位ですホントに田舍へ置くのは惜しい位ですよと云つて全然で治右衛門の爲めに廣告して居るのですスルト田舍は又妙なもので彼處は上手だとなると夫りやア五里や十里位の遠方から遣つて來ないとは限らない決して茶見世屋の婆さん駄法螺を吹く譯じやアないんです……此樣搗梅ですから治右衛門はロク〳〵染物に運のある男と見ねて頗る繁昌をいたし最初は自分一人でポツ〳〵遣つて居たものが二三年の内に小僧の六七人も遣うやうになると家も狹くなつて建增しをすると云ふ位だ　治「アヽ世の中には鬼は無いと云ふが大坂を逐天してから諸々方々と流浪して歩行き不思儀な縁で此村へ足を留めるやうになつたがマツ此分なら何やら其日を送るにも不自由はなし酔議の沙汰もないやうだから漸く安心する事が出來た」と獨り心中に悅こんで之れまでの辛苦も少しく忘れるやうになりました茶見世屋の婆さんも治右衛門の商賈が日々に繁昌いたすのを見て誠に悅こんで居る婆「今まで隨分世話をした人もあるけれどアノ位ひ旨く遣つて退た人はない此分じやアモー安心なもんだ就ては如何か一ッ好い嫁を世話を仕て遣りたいもんだ幾ら商賈が繁昌したつて繁昌すればする丈一人身じやア萬事が不自由だ……ソウ〳〵組頭の三右衛門どんの娘が丁度肖合ひた那の乙香さんならば女は好し縁針は出來るし夫れに手紙の一ッ位は書ける・ッてい事だから那の商賈には持つて來いだ是れても染物の札位ひ付けられなけりやア不都合だから明盲目じやア仕方がない」と婆さん一人で氣を揉んで居る或日の事朝から雨が降り出して見世の方も暇ですから治右衛門の家へ遣つて參りました　婆「今日はお天氣は惡るしす

るから店も閉だしお前さんも職業は休みだらうと思つて咄しに來ましたよ　吉之りやア克く來て下さつた幸ひ俺も骨休めを仕やうと思つて居たところマア緩くり仕て往て下さい」と之から茶を入れて四方八方の咄しを致す　婆「時に治右衛門どんお前さんだつて斯うやつて腕が宜いところから店も繁昌するやうになり小僧達も澤山遣つて往やうになつたがモー安神なものだ就ては是非無くてならぬいは女房だ辛棒に女房と言つちやア男にやア無てならぬ事だ妾もいろ〳〵心懸けて見たが一人爰に好らうと思ふのがあるから聞いて見やうと思ふけれど最初にお前さんの量見を聞いて見なくちやア咄も出來ぬ……如何ですへ之れまで言號とでも云ふのがあつて今迄貰はずに居たのですかへ夫れとも又貰つてあつて落付く先きを見定めてから呼ぶとでも云ふ談し合になつて居るんですか能く此邊を聞かして下せい決し

て遠慮は入らぬい腹藏なく言つて貰はなくちやア困るから　吉「誠に何から何まで親切に有難う御座います斯やつて商賣にありついたのも皆んな貴女のお陰その上ならず女房迄世話をして下さらうと云ふのは何よりの事決して言號があるの女房が貰つてあつて夫れを呼び迎へるのなんて开な譯じやア御座いませんみたやうな者の處でも往て遣らうと云ふ辛棒人さへありやア何卒ぼ世話を願ひましやう　婆「左樣咄しが定りやア何よりだ善は急げと云ふから妾しやア之れでお暇をする　吉「夫は余まり急しいじやアありませんかマア今日は緩くりして往て下せいお婆さんの好な蕎麥でも打つて上ていと思つて居る所だから……婆「爾んな事を云つちやア居られぬいお前さんが女房を持つと云ふ量見なら夫れやア何よりの事幸ひ雨は降るし先方も居るだら當つて見なけりやア解らぬい……マア又緩くり來るからね其

時までお預けと仕やう」と老人の性急で止るも聞かずスタ〳〵往て仕舞つた、治「アーお婆さんは性急だからモー歸つちまつた今日は職業は休みだしするから何か好なものでも買ひに走をして遣らうと思つてたら……併し那して心切に親身も及ばぬ程に仕て呉れるが之こそ不思議な縁と云ふもんだらう一寸旅の足休めに那處で茶を一杯呑んだのが縁となつて今じやアお形で此村へ店を出す事も出來るし斯して商賣も繁昌するやうになつた何か那の人斗りは一生親切に見てやりていもんだ恩送りを致したいと深く治右衛門も喜こんで居る茶見世屋の婆さんは治右衛門の家を出るや否や直ぐ其足で組頭の三右衛門の處へ來ました

三「ヲ、婆さん今日はお休みかい

婆「ハイ旦那さん今日は雨は降るまし一日老人の皺延とは面白いね之から若がへつて新造にならうと云ふ譯だな

婆「何卒かマア

モー一遍新造の時代になれたなら夫れこそ茶見世屋なんぞは遣て居ねいんですが……ヲ、新造の咄してッ言へば旦那さん今日は一ッ願ひがあつて來ましたよ

三「ホー爾うかい何か儲かる咄でもあるのかい

婆「外でもねいんですが私の世話をして染物屋治右衛門どんを存じでしやう

三「アヽ知つてるにもなんにも感心な人さねい遠國者にやア珍らしい辛棒人だ夫に實直な温和いアノ位な男は少ないよ流石婆さんの眼鋭で感心した恐れ入つたよ

婆「爾う褒められちやア困りますが旦那も其の位に思つて居なら家の乙香さんね……

三「ウム

婆「何か治右衛門どんの女房に世話していと思ふけれど何なものでしやうか夫れへ一ッ承りたくて來ました

三「ヲ、左樣か夫りやアマア親切に能く咄しをして呉れたアヽ云ふ堅氣な人にやア此方から頼んでも遣りてい位だ今に那の人は身代を拵へるよ見ねい今に此村で一と

云つて二と下らねいやうになるから……ケレども縁談の事は俺一人の量見じやア定らねい乙香にも克く相談して得心の上で道る事に仕ましやうや婆夫りやア大きに旦那の仰しやる通りだ娘さんが承知しねいものを親の威光で抑へ付け無理に遣つたところで治まりが附やア仕ねい何卒夫れじやア成丈宜い返事を聞かして下さるやうにお願ひます」と婆さん只管頼んで歸る三右衛門は願ふてもなき縁談と思ひます故早速娘を招で咄しを致して見ると別に異存もありませんに依つて其趣きをば直に茶見世屋の婆さんに通知いたすと婆さんも大總喜こび婆「何しても斯咄しが纏まれば結構な譯だ併し旦那さん組頭でもなさる貴郎の娘さんを茶見世屋の婆が氷人をしたと云つちやアお顔にも係はりましやう何か私しはホンの橋渡し媒妁人は立派に誰れかお頼みなすつて下さい」三右衛門も少し魏り者です遠國者では誰しも首を

倒けて左様一ずくら咄しの定まる物ではないんですが人物に目を付けたのはナカ〳〵見込んだ處があつての事夫れ故婆さん橋渡しで跡は氷人を頼んで呉れろと云ふを聞いて三右衛門三「夫りやア往ねい婆さん茶見世屋をして居たつて今日正當な事をして暮して居られるナア之が何よりだ何も身代が良い人を頼んだつて夫が見榮になるものじやアねいから俺しやア正直な人が何寄りだ身代の善悪を云ふんじやアねいから詰らねい事を云はねいで折角之れ迄骨を折つて呉れたもの序に媒介の高砂までお頼みヤしていものだ婆さんも斯う云はれたから快よく承諾をいたし早速双方の話しも和熟いたしまして治右衛門乙香は目出度固めの盃も濟み仲睦ましく暮しました

第二席

治右衛門は由井村へ落付き茶見世屋の婆さんの世話で女房まで貰ひましたが中々氣立ての往い婦人で仮りにも夫に對して評論をする抔と云ふ事はない斯の如くして七八年の間と云ふものは別にお咄しもなく無事に世を送つて居りましたが益々職業は流行ばかり今では由井村の治右衛門と云つたら近郷近在で此位の染物屋は無いと云はれる位であつた、ケレども夫婦の間に子供と云ふものがない恐らくは家を持ち妻を持ちまして子供のない位い楽みのない事はありません年を老つて世態と云ふものがなければ誰れが死水を取つて呉れる事やら幾ら金ばかりあつたとて浮座いません治右衛門は只管此事ばかり心配いたして居りましろで親身の情と云ふものは別なもの金や寶で買はれるものでは

て時々愚痴も出ます乙香は初めの内こそ慰めて居ましたがモーそれ七八年も連れ添つてゝ見れば出來るものなら出來ます之り

やア克く〜子供の授からん事と今では亭主に翻されゝば自分も共々愚痴を云ひたすやうな有様　治ナア乙香人間も四十と云ふ聲を聞いちやアモー駄目だ自然と若い時の魂氣と云ふ物がなくなり分別が付き過ぎて却つて先きの事ばかり心配になる夫れにしても俺は若い時から遠國を流浪して少しも身体の休まる瀬もなく斯う漸々の事で此村へ落付く事が出來てからは一生懸命商賣大事に汗水しぼつて惜いでマア何やら其日にも追はれないやうになつた其内にお前とも縁あつて一緒になる事も出來之で先づ安心と思ふて一層骨を折つて稼いで居たが情ないかな子供と云ふ君が無い何の爲めに斯して稼ぐと云ふも子供でも出來たら不自由ないやうに仕て遣りたいと思ふばかり夫れだのに稼いで貯蓄た金錢も讓る可きものがなければ詰らん譯お前も矢張り左様だらう他の子供衆を見るに付け必度欲いと思ふだらう、エ、

乙香何したら子供が出來るものか知らん喊に張合ひのない樂しみのない事だのう」と治右衛門は頻りに子供を欲がつて喞がましくすす乙香に於ても其通り

乙「眞實に欲いと思ふところへは授かりも仕ず入ら無いと云つてる家へは幾人も出來て皆な達者に育つて居るが皆な之りやア神の授けと幾ら欲しいと思つても授からなければ據どころありません……と慰さめ兼て居りましたが忽ち思ふやうに乙「古しから子供のない人は神佛へ立願を籠め授かつた者もあるとのあと今も話す通り神樣の授け事だと云やア隨分左樣云ふ事の無いとも限るまい物は試しだ心を籠めて祈つて見やう……と不圖思ひ付きましたから夫にも此事を咄す

治「夫りやア宜い處へ思ひ付いた何でも神信心が一番だから今夜は二人して天を祈らう何の神でも天道樣が基だ天を祈つて授からないものならモー夫れ迄と諦め決して他も愚痴を云ふま

いから……と二人相談も決定まして夫から三七二十一日の間庭へ出ては非の水を浴び一心不乱に祈誓を懸けました然るに不思議なるかな颯と吹き來る俄かの暴風に灯は消へて黑白も分らず四邊は眞暗になりました乙香は風に吹き飛ばされまいと思ふから井桁へ捉まつて俯伏になつて居る其中に風も止んだから乙「マア宜い塩梅だ此分じやア風も烈くもなるまい急にマア那な風が出て妾しは吹き飛ばされるかと思つた」と獨り言を云ひ乍らとヨッと頭を揚げて見升ると遙か彼方の石燈籠の影に誰やら佇む人があるらしい乙「怪しいねい誰も彼處へ來る筈はないんだが……と熟々見れば年未だ若き一人の壯士身体は槍疵の爲めに血汐はコン〳〵と流れ出で恰然唐紅の口椒を染たやうな有樣で怖ろしなんぞ云ふばかりなく一目見てゾッとするやうな手負人が立つて居ました乙香は之を見るより魂も身に添ばこそ叱驚仰

天「キャッ……」と一聲叫ぶかと思ふと我と我聲に驚いて不圖目を攪して見ると之なん仮寝の夢で御座いまして自分は夫は枕邊に寝て居ましたがナニシロ斯様恐い夢を見たんですから悠身びつしより汗を掻て動氣が頭りといたしました、處が之からと云ふものは心地に平常のやうでなく見るものも見ないと云ふ譯で乙「香は全く懐妊を致しましたので御座います月滿て慶長十年五月の一日お産の紐を解き安々と産み落したのは玉のやうなる男の子で御座いますから サア治右衛門は大喜びだ 治「何しても之りやア天へ祈つた甲斐があつて欲い〳〵と思つて居た子供は加も男の子だと手の舞ひ足の踏むところを知らざる程嬉しがつた一日二日と經ちモーお七夜にもなりましたからして何とか子供の名を付けなくてはならない 治「乙香やマア之れお前も初産だが誠に輕くつて俺も安心したよ 就てはノウ今日はお七夜だし是

非名を附なくてはならないんだが何と附たもんだろう昔しから名は体を顯はすと云つて弥次だとか喜多八だとか云ふと矢張り道中膝栗毛にでも引張り出されて貧乏長屋の隅つゐに住うやうな譯になりそうだ之りやア何でもズデカイ日本一の名を取つて此子の名前に附けて遣りたいと思ふが如何だらうかのう……乙「左様で御座います夫は至極宜しからうと思ひます……日本一……何がマア似合ひの善い名になるでしやう日本一の悪子に云ふがアリや桃太郎の咄しだから正逆に桃太郎と付る譯にも往ましいし……治「イヤ〳〵俺の考へは中々ソンな事ぢゃアないんだ、モッと大きな名を付けたいと考へて居る……見なせい外方へ出て見りやア梧鉢を取つて伏たやうな富士の山アレこそ日本は愚か三國一の富士の山だ那の富士と云ふ名を取つて富士太郎と付て遣りたいものだがお前は何と考へる富士太郎……

面白いではないか随分剛氣な名だからして……乙「貫郎中々旨い所へお氣が付きなさいましたよ夫は宜い名ですよ外に變へないでソクと付たら宜でしやう」と云ふ譯で之から富士太郎と云ふ名を付けまして夫婦の者は掌の内の珠玉の花と慈しみ育てゝ居る内に盈れば缺くる世の習ひ兎角く善事には魔のさし易いもので其翌る年では座いますが乙香は不圖病の床に臥し病むこと僅か六七日でポックリ死で仕舞つた……アンマリ脈氣ない死にやうで……治右衛門も折角女房を貰ひ欲い〳〵と思つて居た子供まで出來商賣も追々繁昌いたして參ります處へ肝心な乙香に死なれましたから實に力を落して仕舞ひました茶見世屋の婆さんも知らせを聞いて飛で來たが之も余り多隈もなく死なれて仕舞つたんで何だか斯う狐にでも化されたやうな氣が仕てポーッと致して居ります近所隣のものも之を見て誠に氣の毒に思ひ色々と

慰めて呉れて居るか例日も元氣の宜い茶見世屋の婆さんからしてポーッとして力を落し氣抜けの躰であるから實に之には近所の者も困つちまつた　×「チーお婆さん折角お前さんが世帶の心配から女房の世話迄して遣つた那の乙香さんに死なれちやア定めて落膽仕なさるだらうが之も據ところない譯の事若い者が先へ行こともあるかやア老寄の跡へ殘る事もある老少不定は世の習はせマア〳〵諦らめてチッと元氣を付てお呉なせい吾頭取りのお前さんがソウ張合抜がして仕舞つちやア近所の者も手の付けやうに困るから夫に治右衛門様だつて那の通りの沙愁傷だサアお婆さん例日のやうに一ッ元氣を附てお呉なせい婆「ハイ〳〵皆さんの心切は有難うがすが俺も今度ばかりやア自分の子供を亡したよりも失望しましたよ斯して氣立の宜い嫁を世話をして子供迄も出來てヤレ嬉しいと思へば今度のやうな事になつて

仕舞うしマア乙香さんも克く〳〵綠が無いんだねー　×「何も之れ老少不定で金盡や力盡では迚も何する事も出來ましねい此れ迄の帶命だから諦らめて跡の追善供養が何より肝心で傍廣ねす何かお婆さんチッと確りかまして お呉なせい　婆「モウ〳〵俺も諦らめました死ぬ者貧乏……據どころありましねい……サア治右衛門さん俺も最うブッツリ諦らめた今も傍所の衆の云ふ通り跡の追善供養か肝心だサア〳〵愁傷も尤ともだが嘆いて居る場合じやアねい確かりして立派に葬れいを出す方が宜らう」と漸や く少し元氣が附て之から萬端茶見世屋の婆さんが差圖して未だ之れ世帶も持ちたてゝすから里家の旦那寺へ葬るゐとに致しまし たア之から云ふ物は治右衛門に於ては富士太郎を養育いたすを樂しみに後妻と云ふものは貰ひません扨光陰に成長いたし成なりましたが實に筋骨逞ましく水に

よれば水練を學び山に登れば木を代つて太刀薙刀の形を作り石を打ち木を叩いて專ら武藝を研究いたし或は野飼の駒に打跨つては馬の稽古をいたしたり其外槍術弓術に及ぶ迄孰も緞練いたさぬと云ふ事はない、夫れだものですから或時は近所の子供でも聚ては自ら餓鬼大將となつて軍事などをいたす夫が自然と法に適つて自得するといふやうな譯ですから人皆之を神童と言つて褒める位だ處が父の治右衛門は余り富士太郎が敏捷く何事も一を聞いて十を知ると云ふ有樣ですから却て子供の行末を案じて居る　治何かマア、那分で素直に成長して呉れば宜が善なれば善らうけれども若も側へ反て惡くでもあつたら夫こそ如何な事をするが解らない殊に天へ祈つて儲けた子供であつて見れば自分の兒とは言ひ乍ら我子にあらざる彼の性質夫も未だ俺が若くでもあれは宜けれどモー之れ五十の坂を越し且は近頃になつては誠

に病勝にはなつたし悴の成長を見屆ける事も覺束ないがシテ見れば先づ安全に那れの生涯を送らせるには外に致し方もないから出家させるより外はあるまい、ソーでもなければ終に一生を誤る吾れと吾が命を縮めるやうな事になるだらう」と頻りに悴富士太郎の行末を案じて居りますます斯いふ盛梅に治右衛門も最早心中充分決心いたしましたから十五の春に至り夫、とはなしに得心させて旦那寺の住持に委細の心を打明け治「何か何分悴の行末をお願ひ申す」僧「ハイ夫では及ばず乍ら佛の道を授け名僧となるやうに骨を折りましやうから」と快よく諾ひたるに依り其日からして直に寺へ止め置き最初の内は朝夕の掃除などをさせて盛いたが扨利發な富士太郎でありますゆへ何事も言はれぬ先きから氣が付くと云ふやうな譯……當分の内は頭も剃りませんで其儘若衆姿で居りまして經文を敎ゆられたが一度讀んで聞かせられしば二度と尋ねないと云ふ程ですから此分では忽ち内に師匠の知つてる丈は敎はつて仕舞ふ事も出來ます夫れ故住持は其尋常ならぬ才智に驚き吾を振つて末頼母敷思ふ位ひ其内に治右衛門は兼て已れは長生をする事の出來ぬと云ふ見極めが付いて居たが其年の暮れから病の床に臥し重き枕に就いたところ醫藥の驗は更に無く五十八歳を一期として終に空しく相成りました富士太郎の嘆き大方ならず死體に取付いて前後不覺に悲しんだが生者必滅會者定離老少不定の習ひをば住職より暮々も覺ゆられたる事故近所の者や親類の人達の慰むる言葉に吃つと思案を致し　實幾ら泣たつて死んだものゝ還る譯でもなし此樣諦めの惡い事では吃度お師匠さんに叱られるだらう……とソコは子供作らも怜悧ですから充分に諦めを付け野邊の送りも濟ませ四十九日や百ケ日追善供養も懇ろに致しまして之から家財道具は悉

皆賣り拂ひ幾許かの金子を手に得たに依り　富お住持さま此の金子は父の丹精した家屋敷から諸道具迄も賣り代なして得ましたのですが何か修行をして一家の住持に成ますまで預り置き下さいまし　住職宜、ともお前が一人前の寺持となれば屹度格式のある寺院へなはられるだらうが夫迄は貧道が確と預つて置くから安心いたすが宜い　富何ぞお願ひ申すと云ふので富士太郎も其金子は正逆の用意にと思つて預けて仕舞つた夫れから云ふものは一層身を入れて昼夜勤行に怠なく經書史傳に至るまで孰れも目を通して讀まないものはなく雪の功を積で佛書一通りは勿論のこと經書史傳に至るまで孰れも目を通して讀まないものはなく俳し人と云ふものは妙なもので學問を致せば致す程人物が高尚になつて志の大きくなるものと云ふ　之れは即ち學問の德で有難い事であります……デ富士太郎も頭

かしたるを見近は彼の太閤秀吉の事などを思ひ比へで　富アヽ人と云ふ者は將軍になるとか關白になるとか云ふと隨分大した豪い事だが唯之れも器量次第のものだ王侯將相何ぞ種あらんやと云ふが俺も父の仰せに依つて斯して此寺へ這入つては居るものゝ何も生涯寺に居て線香沫香の烟りに燻ぶつて居ると云ふも氣の利ない譯例合望みは善かれ惡かれ一度大名を末世に殘さなくつちやア產れた甲斐もないと云ふもの幸はひ未だ頭も丸めずするからして何かに取つて僥倖の幸ひ、ヨヽ〳〵之から一ツ志を起して名を擧げ身を立る手段を考へやう」と腕を組で考へて居る、オ翌る日になりましたとおろが夜が明けてもナカ〳〵富士太郎は起きて來ない一体寺と云ふものは朝の勤めと云つて總別早いもの　×「チヽ寺のお勤めだ何れ起きやう……」抔いふ位ひ先づ薄暗い内に起きて本尊の前で經を讀む之を考へて見ると坊主

全備けと云ひますが中々骨の折れたもんだ　×「邪念さん何したんだらうね未だ富山さんは起きないねアノ朝起きの人が何したんだらう……夫とも一お腹でも痛いのか知らん……と所化達が二三人で部屋へ參り　と「富士さんモーお日が昇つたよ起きないのかい夫とも腹でも痛いのかい」と起しましたが何とも挨拶をしないで其内に住持も來て　住職「何した〳〵未だ富士太郎は起きないのか……ナニ呼んでも起きないつて夫奴は可笑いな……」と側へ往て揺振を搖つて見ると富士太郎は叱懲して飛起きたが怪しむべし口を利ても出來ず手を振つたり頭を振つたりして　富「アヽ……アヽ……と云つてる斗りだ急に之は啞になつたんですから住持を始め居并せたる所化達も叱懲して　一同「ヲイ富士さん確乎仕ないか一体如何したんだいエ口が利ないのかい」と云つても更に受け答へもなく只アヽ〳〵とばかり云て居る住職も此有樣

を見て　住「之じやア迚も出家させた所で經文も讀む譯には往すするから役に立どころではない扨不愍なものじや何かして此病氣を治して遣はたいものだと之から名醫といふ名醫を招でイロ〳〵治療を仕たが治らない……尤も幾ら名醫だからと云つて此ばかりは治る筈はないので全く富士太郎が詐つて啞の眞似を致して居る事ですから之れが藥の力で治つたら之こそ不思議だ……住職も手に手を盡して治りませんから　住「之れじやアモー迚も仕方がない寺へ置たところで啞では仕方がない」と據ところありません故由井村の組頭三右衛門の所へ使を遣り外に頼寄る所もない富士太郎の事ですから結局母親の里へ遣るよと仕方がないデ此赴きをば事明細に認め飛て預り置たる金子三百両を富士太郎に渡して遣つたので三右衛門も大總叱懲いたし　三「ナニしても娘乙香の遺れ片身だし俺達の爲めにやア初孫の此富士太郎

何か手を盡して一先づ本復させて遣りたいものだと神に祈り佛に念じ手の屆く丈は盡しましたが前にやした通り富士太郎の之は計略ですから治る筈はないこの方は富士太郎に置きましてはマンマと首尾克く偽啞の計略が圖に當り首尾克く寺を出る事も出て來ましたから富マッ〳〵之れで一安心だ去らばこれよりの諸國を巡り武者修行の傍らに忍び〳〵に同志の者を語り誓つて大事を起す可しと愈々決心したが隨分物騷な人物ですから……之より密かに旅の用意を整へ兎も角起すと云ふんですから……斯して心配をして下さる祖父樣の事、なんとか一筆書置きを致さんものと筆を取つてサラ〳〵と認めました

私事此程より不幸にして啞に相成今更ら世の中に用なき者となり果てやゝ因て今より回國の修行者となり神社佛閣を順禮いたしゝて亡き二親は言ふも更なり伯父兼房齋が爲めにも冥

福を祈らんと思ひ起しゝへゝへ共愁じひに暇を許し玉はしと存じゝへば此儘秩を分ちやゝ就ては又涉願ひや度義有之やゝ之は別義にもいはねど末かぎりなき旅路にゝへば身の守りなくては相協はじと依つて家財道具を賣り拂ひたる三百両の内五十両をば代といたし殘し置きやゝに付豫て涉秘藏の來太郎國光の一刀は某しへ賜はり度只管希上たてまつりゝ申殘したき事は山々有之ゝへ共何れ修行の終りゝ上改めてお咄しやゝ可くゝ以上

元和九年春　　祖父　富士太郎

樣

と認めて密かに祖父三右衛門の秘藏せる來國光の一刀を腰に帶し密かに家出をいたしましたが若しも此書置きが早く見付かつて追手でも出されては却つて迷惑いたすと其日は富士淺間の社

へ參詣をいたし森の中に隱れて居たが案の定追手が出でましたけれど誰だつて淺間樣の森に中に隱れて居やうとは思はないからトウ〳〵見付かりません此日は一日森の中に日を暮して仕舞ひ日が暮れてより社壇へ登つて樣側に腰を懸けック〳〵と身の行末を考へて居たが

富ナニ

しても今の世の中と云ふものは第一に家柄だ夫れに才智がなくつては迚も大望を企だて成就すると云ふ事は來出ない然るを今紺屋の息子の富士太郎だと云つては誰一人相手にする者はなからうし同志の者の心を繫ぎ留る譯も相成らんこりやア何でも宜系圖を考へて其の子孫だと云ふ事に吹聽しなければ迚も宜く往笘のものでないハヲ誰が宜らうかしらん太閤樣だつて尾張の百姓の子息だと云ふんで後に出世してつから姓のないのには閉口したことがある武田信玄あたりは如何だろう信玄の後裔……此奴も何だが強い一方で更らに天下

の人望は繫がれそうも無い……ム、有る〳〵古今の豪傑楠正成那れなれば人も知つて居るし、ナ、正成よ正成よ……なんて小學校の生徒でも唄つて居るから……正逆其頃此樣軍歌のあつた譯でもなかつたんですが何しても正成の末裔なりと稱して人の眼を眩ますのが第一だ之にやア手術の種が入る」と之から深く工夫に及んで証據らしい品々を取集めて淺間の社の片側なる杉の大木の根方を堀つて之れを埋め自から改名に及んで

由井民部之介橘正雪

と名乘り、且ツ社内にあります

男子不穿錦袍到豐將双脚踐社壇

と矢立てを取出し墨黑々と書き了り心靜かに社前に拜禮いたし夫より駿河路を跡にし追々上方筋へと登りましたが名張の山中において非々退治の件より一人の勇士に出會の物語り次席に讓

つて伺ひます

第三席

淺間の社を立出でたる正雪に於きましては心に思ふ謀計があります從らして先河内の國に至り只管正成の古跡を尋ね道明寺千早金剛山等をうち廻り同國蟹井の八幡宮へ參詣いたしスツカリ手拭りをば探りましなから

正「先づ此れ丈の証據があればモー澤山だ正成の後裔と名乘つた所で誰も僞だと云ふ者もあるまいと之から河内の國を出まして參りましたのは伊賀と大和の國に境ひなる名張山の麓で俵座いますが折しも百姓共四五十人ばかり竹槍や鎌などを持つてワッ〳〵と閧の聲を擧げて走て參ります正「ハテナ那の人聲は何だらう喧嘩か知らん夫にしても斯大勢で追掛けて來るからには孰れ相手は剛の者ならん如何なる勇士や

來らんかと皆を定め小手を翳して見てあれば怪しむべし人にはあらで一匹の怪獸身の丈六尺おまりにて惣身は火よりも赤く頭は雪よりも白くして其毛は長く地を曳き小さき両眼の光りは星の如く口は血を盛る盆に似て其姿の恐ろしい事は身の毛も寄立つばかり此怪獸は只追はれて來たばかりと思ひきや二八ばかりの未通女を小脇に掻込み泣叫ぶのも構はいざそ砂石を蹴立て草木を踏鳴し驀直にと駈け來る正雪は斯と見るより正「コハ傳へ聞く非々と云ふ獸物ならん此奴ナカ〳〵多淫の性質なれば此邊りの未通女を掠ひて逃來りしも圖られず惡く一き獸物が振舞かな卒や刺止めて呉れんものを」と火急の場合にも氣早く悟り身構へる間もあらばよそ睡く間に飛來つて既に往過ぎんとする程に正雪は隙さず走り出で手早く笠に掻なぐり正「俺れ怪獸ッ……」と云ひさま駈隔てゝ立塞がりましたゆへ非々は邪魔者が飛び出した

んで大に怒り哮り未通女を片邊に投げ捨て牙を鳴らし爪を張りアハヤ正雪に飛かゝらん有様なり正雪は怪獣に立向ひたる儘些とも驚かず國光の一刀を拔き放ち呼吸を揃る初太刀の懸引き……を見たる怪獣に於てもソウ一寸くらとは懸つて來ない互に隙を覗ひ居りまするネナニシロ非々の方は充分怒り切てる事ですから一聲叫ぶとともに飛鳥の如くに飛蒐るを正雪は早くも身を換し又飛來るを遣り違はせて暫時は彼所此所と相しらつて居ると獣物は益々怒り立ち今度は正雪の頭を目蒐けて喰ひ懸らんと致します……此時に正雪も喰はれて仕舞へば後に慶安の騒動も持ち揚げないで天下も穏かに治まつたんですが夫では講談師社會の米櫃にはならない何が幸はいになるか知れたもんじやアなゝ……正雪は頭を目懸けられたから身を沈ませさま國光の一刀を取直し突上げさま咽喉から頂へグサと貫ぬいたは流石は手練の

刀尖故急所の深疵に堪ら怪獣でも堪りませんや両方の手で刀を握りながらと、と笑つたか何だか其邊は了解ませんが正逆に突留められて幾ら非々だからッてと笑つた譯でもありますまい正雪は二の太刀にて横腹をシタヽカ突たからモー荒れ廻る事も出來ませんから足を擧げて動と蹴倒し乘り懸つて絶命を刺しホッと一息吐て居たが夫處へドカ〳〵ッと農夫たちが蒐て來ましたけれど此有様を見て呆氣に取られて恐々獣類を覗くもあれば正雪の伎倆に驚いて頻りに褒る者もある此時群衆の中よりして容貌賤しからぬ夫婦の百姓は逸早くも震へ慄き乍らソコに蹲くまつて居る娘の側に走り寄り抱き起して其恙なきを喜びましたが頓ての事夫婦の者は正雪の前に跪き　△「何處のお方様かは存しませんが俺は此名張山の麓に住む百姓の半左衛門とヤしますが之なるは娘のお染と云つて俺等夫婦の終娘で御座います處

が今日は天氣は好しするもんですから俺は作男を差圖して彼方此方と見廻つて居るところへ之なる女房が狂人眼で飛で參り今之々の獸物が出て來て娘の油斷を見て突然浚つて參つて仕舞つたと火急の知らせ俺も叱驚して直に作男と一緒に近所の方々をもお頼みヤし跡を追懸けて參りますと遙か彼方で娘の泣き聲が聞えたから夫と云ふんで尋ねて來たところが其疾いこと云つたら矢を射る如く迚も一日追懸けた處が助ける事は出來まいと思つて居る矢先きお武家様のお情けで娘も無事に助けられ怪我一ツ致しませんでゐ座いますが貴郎は全く命の親誠に有難うゐ座います」と平身低頭して禮を述べ　半「コレ娘よ手前も茲へ來てお武家様にお禮をヤさねいかお染サ早く此處へ來い……ハイお武家何とも有難い次第でゐ座います」と共々挨拶をいたす正雪は朴訥なる田舍片氣の半左衛門夫婦が頻りに禮を述べられるの

を見て　正「イヤ〳〵夫様に禮を云はれては却つて困る斯して拙者がお助けヤすも又斯いふ場合に出逢うのも何事も運り合せの緣とでもヤすものであらうヤア何してもお娘御さへ怪我がなければ夫か何より頂戴……ドレモー日も暮れ懸るから之にてお別れヤと致そう」半左衛門も漸く氣が注かず我ながら愚かの事をいたしました最う之れ入相の鐘も鳴るし穢い處ではゐ座いますが何か今晩だけは私の家へお泊り下すつてゐ休息なすつて下さいまし何せ何地か宿をお取りになりますしやうから……　正「イヤ〳〵ゐ厄介になるもお氣の毒な譯殊に某しは先路を急く旅の事ですから今宵は爰でお別れヤましやう亟ねてゐ緣があつたらお目に懸ります」と夫婦の者が留まする袂を振り切つて行うとするお染は之を見てハッと驚き恥かしさも打忘れて正雪の袂に縋り　染「行手を急ぐ旅路と

仰しやいまするを強てお留めアすも失禮ではゐ座いますが夫では切めてお名前丈も……」伴「ヲヽホンに娘に言はれて氣が付たと云つては年甲斐も無いやうだが何ぞ夫ではお名前丈も名乘つてお聞せ下さいましと只管頼みますすにより正雪も笑ひ乍ら正「イヤ〳〵其様立派な名前の者ではない武者修行をして諸國を遊歷いたすもの由井民部之介橘正雪と云ふものだからサア之でお暇アと致そう半「イヤ〳〵左様仰つては猶々お止アさなくてはなりませんとアすは他等夫婦の者は誠に子供に繼が薄く大勢あつた者が今では之れなるお染一人……ソレさへ今日のやうな事が出体いたせば既に一命も危うき處然るを此武家様貴郎のお影を持ちまして斯うして命目出度扶かりまして見れば娘を拾つたやうなものの何かソウ仰しやらずにお泊りなすつて切て夫婦の者が此恩の萬分一を送らして下さいまし其外貴郎のゐ懇望となら

ば田地田畑は素よりのこと何なりとお心の儘に從ひましやうから」と云ふ譯で袖を扣へて半左衛門始め一同の者が止ました述る言葉をツク〳〵と聞及んだる正雪に於ては正「ハヽア田舍の人は堅いものだ之しきの禮に田地田畑を亡しても苦うないと云ふが尤も未だ他は子供と云ふ者の可愛い味を知らないからかは存せんが何しろ斯う大勢で止られて夫を振もぎつて行くには六ケしい事だ……と云つて武士たる者が町人の言葉に甘へてウン左様か夫れとやア往て厄介にならう當分お前の處へ足を止やう何分頼むと大きな面をして娘の恩人だ位の事を鼻に掛て居る譯には往ない夫にグヅ〳〵して居りやア日が暮れて仕舞うし是非に及ばん先方の厚意に背かんくては相成らん」と胸に問ひ胸に答へまして正「イヤ段々のお言葉正雪身に取つて辱ない、ケレども武者修行の身であつて見れば斯く人間に害を及ぼす猛獣と闘ひ害

を除くは當然のこと何條恩に着せる事があらう何か此儘お暇す
すから止だてを爲ないで呉れろ止られては返つて迷惑に存ずる
……併しながら吾れとても斯く武者修行に出たからには些か身
に覚みのあること夫れ故尚十四五年も往てから時宜に依つてお
前の世話になり此方から頼むと云ふ事があるかも知れない其時
になつて今日の事を思ふなら何か力を貸して貰ひたい……とサ
斯うばかり云ては分るまいが何を致すにも農家に頼むには外で
もない米だ其米を貯蓄て置て貰ひたい仔細は跡で分るから……
と云ひ捨てゝ行かんと致す時不圖氣が着いたは脇差の鞘だ　正
扨々飛だ事を致したアノ猛獣を仕留る時に大切な小柄をなくし
て仕舞つた」とソコラ此處等を捜します半左衛門も打驚き　半「サ
イ皆な其處等捜して呉れ正雪様のお腰の小柄が見なくなつたつ
てから既れも夕方の事ですからカヽグリ作ら探しますと草の中

に何やらピカリと光るものがあるお染は手に取つて見ると果し
て鞘で御座いますと手に取揚げて土を拂ひ正雪の前へ持つて往か
うと思ひましたが何か不圖胸に思ふ處があると見て自分の差し
て居る簪を抜きとり双方比べ合して見ますと長さも全ことで
何地も銀で造らへたものだお染はニッコリ笑つて密かに件の鞘
をば袖に押隠し我簪をば拾ひ上たる振にて　染「サヤ此處にあつ
たお父さん此處にありましたよ」と云つて父に渡す半右衛門は之
を見て　半「ナヽ之だらう〳〵……夫でも克くお前が拾つたノ……
……エヽお武家様お尋ねの鞘とやらは之では御座いませんか」正雪
も日は暮れるし之から何處か宿を取らなくてはならんと云ふ氣
がドンチャン仕て居る處ですから別にソッ館も見なかつたもの
か　正「慥かに之れだ之れに相違ないと云つてヒタリと腰に帶し
正「夫では之れでお別れヤそうと云つて挨拶もソコ〳〵に鉄を分

つ娘のお染はポンヤリして陰の見へぬ迄見送りました　半「ヲイ
お染や……お染……お染ッてばお前は急に聾になつたかい……
コレお染……　染「ハ……ハイ……何か用でも……　半「ナニ別に
用じやアないがねいお武家様も往てお仕舞ひなすつたものだか
ら歸らうじやないか夫を幾らお染々々と云つてもポーッと仕て
居て返事もしないからさ」お染もハッと氣が付て顏を眞赤に致し
たが何も所謂なくして顏を赤くする譯もなし殊には自分の籍と
正雪の絆と摺りかへて置くなぞ下手に聞けば躰の宜掏賊だ油斷
の出來ぬい女泥棒だ併し何も決して正雪の方が銀の性が宜から
取換へて置て遣らうと云ふ譯ではないッコは又當人の身に取つ
て見ますと可愛想な處ろがある、と云へば何か演者が掏賊の最負
でもするかと斯う思召す方も浮塵いましやうが決して左樣じや
ない鬼も十七の娘盛りですものゝ男振りのゝしい正雪の樣

子を見ましては誘ふ戀風の身にしみ〳〵と吹き渡り夫とは打つ
けにもヤされませんゆへ切ては戀しき彼君の肌身に添ひし此鉾
武士の魂とも申す可きお腰の物に付て居た此品なれは取り換へ
て後の紀念にもと思ひ朝夕思ひ思へば不愍なる心根であります
紀念こそ今は仇なれ之なくば
忘るゝ事もありなんものを
昔の人はナカ〳〵人情を穿つた和歌を讀だもので反て此紀念な
どの品をとつて置のは何かに付けて忘れられないもので兎角此
お若い女中衆に於ては猶更の事お嫁入の邪魔にさへなるとヤす
程　女「ホントに俺の亭主は否な奴だ思ひ出せば三年跡だつけア
ノお正月歌留多遊びの晩に貰つた此紀念は」などゝ云つて密と取
り出しては思ひ出して居る亭主よそ宜い災難だ折角嫁を貰へば

外の者に岡惚れを仕て居やがらア詰り夫れが不縁の基と相成つて離縁になると云ふやうなもの夫ですから幾ら男は氣量で女を こしらへる抔と云つても余り斯んな事を致しては宜しくない第一罪です殊に風俗壞乱で沙座います……お咄しは余り外道へそれまして恐れ入ました之より正雪は道を急いで參りましたが漸く名張の宿へ出ましてソコに一泊いたし翌る朝も誠に晴天ですから逗留いたさうと存じたが余り烈しく非々と聞かつた爲め何となく今朝は身節が痛い據どころありません故一日逗留して居ると忽ち此非々退治の事がパッと噂になりまして專らの評判實に電信より早いや正雪も宿の者に悟られるのも余り本意でないナゼと云ふと此位の事でヤレお武家樣ソレお武家樣とチヤホヤ爲れるも實は本意でない夫れが爲め一両日逗留仕やうと思つたが翌る朝は少し早立ちに致し之より日を經て加賀の國に到り

大聖寺の山にかゝらんと致す未だ之れ日も未の刻只今でアすこ時頃ですからナカ〳〵泊りに着なぞと云ふ譯ではない去れども旅から旅へ出て居る事ゆへ山坂なぞへ懸つては隨分疲れる時もある　正「イヤ何も今日程疲れた日はない未だ〳〵此山を越さなければならんけれども迚も此分とやア越せない幾ひ此處に山中年ら も一軒の家が見ゑる泊て呉れるか如何のものと尋ねます正雪此山家に宿り圖らずも夫婦の物語りを聞て勇士の跡を慕ふの咄し大聖寺山中の試合次席に於て詳しく言上いたします

第四席

エヽ引續いて伺ひます正雪は疲れを休める爲め山中の圖ある家に泊りましたが見受ける處老人夫婦の外誰も居たい四方八方の咄しをいたして居ると主人はナカ〳〵咄すきと見ゑて　主人「お

武家様貴郎も此頃流行る武者修行とやらなさる方でゐ座いましやうな何も爾う云ふゐ様子だ　正「ウ如何にも拙者武者修行の者であるが此頃流行るとは妙なことをいすな主人　主人「へゝ何も流行るといす譯でもゐ座いませんが……　正「夫でも今流行るといしたではないか　主人「へエ正「デは何だな此頃拙者より先きへ參つて貴様の家へ泊つたものがあると見へるな　主人「實は左様でゐ座いますよ……エゝ昨晩彼之れモー夜中過でゐ座いましたが十六七にもなりましやうか貴郎のやうに殿めしい身拵らへて

ドン〳〵〳〵と戸をお敲きになる　正「成程……　主人「處が道に迷つて誠に難澁いたすから是非泊て呉れろと云ふ譯お安い御用とお泊めいしたが大層疲れて居たと見て纏て午時すぎまでも寢て居らしつた　正「フムー　主人「隨分寢坊な人があるものですがと思つたがマア〳〵年の若いに武者修致をするとは殊勝

な譯だと打捨つて寢して置くと梁へ釣して置いたアノ玉味噌へ鼠が懸つて釣て置いた繩をプツリ噛切つて仕舞つたから其玉味噌は寢ね居た武士の頭の上へ落ちやうとする俺は吃驚してソラ玉味噌がッ……と云ふと其聲にビックリ爲たのかお武士はイッか立ち揚る玉味噌は二ッに割れて飛び出した　正「ウム玉味噌が二ッになつて……成程方角違ひに飛だと夫から如何いたした　主人「俺も不思議に思ひました玉味噌ですから落ちれば碎けて粉になるだらうし又上から落ちたものが急に中途で宙返りをして横へ飛と云ふのも不思議な譯だとヒョッとお武家の方を見ると眼を摩りながら抜身を提げて居ましたる扨こそ玉味噌の二ッになつたも尤も美事に身が切つたのか云ふとイヤ玉味噌とは知なかつたが何だか顔の上へ落ちて來たから終あまりに逸つて此樣事をした面目ないと云つて笑つて居ましたデ其お武家が立つた

跡へ又貴郎がお泊りでしやう夫れだから武者修行は當時の流行物だと思つてツイ口が辷つたんで決して惡氣で言つた……正「イヤ〳〵主人何も拙者はお前を咎める譯じやアない武家の切口上とやらツイ云ふ事に角が立つて往んのう、ヤテ〳〵其侍は何れへ參るとヤした　主人「私も能は知りませんが何でも之れから越前へ越すと云ひましたが左樣ですなー大方山の中程迄は往ましたらうよ　正「ヲヽ未だ爾なものか……と正雪は頻りに其侍を懷かしく思つて居ると云ふものは今にもあれ大望を企てる時には相應の大將がなくては相成らんけれど今老人の咄しではナカ〳〵の腕前斯る者と交りを結んで置けば後日の役にもなるだらう萬卒は得易し一將は得難し何れにもあれ之より跡を追掛けたなら追付かぬ事もあるまいと獨り思案に及び　正「ハ主人急に斯んなこと云ふも異なものだが何となく拙者も其武士に逢つて

見たくなつたから未だ日も高し之でお暇を申す」と云つて腰なる巾着を探り幾らかの心付けを與へ其儘ツ〳〵と表へ驅出ました主人「何だい那の侍は可笑な奴もあつたものだ玉味噌を切つて咄しを仕たら急に考へ出して折角厄介にならうと思つたがお暇をするつて今日は余程妙な日だせナア婆さん……　婆「爺さんやお前さん爾う云ひなさるがお武家樣てものは武藝の出來る人の咄しを聞くと直に仕合を仕て見ると云ふ事だから屹度之から今のお武家の跡を追掛けて山の中で初めるだらうよ　主人「ヤテ見ると武者修行なんて堵にやア迂かり咄しは出來ねいナ言やうが惡いと喜劍勝負なんて譯になるかも知れねい」正雪は老人夫婦の者に禮もソコ〳〵直走りにトン〳〵遣つて參ると丁度山の中央程で日はドップリ暮て仕舞ひましたがソンな事は拙はない尚も道を急いて參ると小松の影よりパラ〳〵ッと三人ばかり往手人

立窓がつたが何れも一刀を拔き放つて無二無三に切り付けた正雪も不意を喰つてギヨッと仕たかち一足跡へ飛しさり　正「何者なれば往來の邪魔をいたし剰さへ及を振つて仇をいたすか」と眦と四邊を白眼ますと　×「ヤイ〳〵何を吐しやアがるんでい幾ら天下の往來でも此山中は俺の、細張り網を張つてる其中へ飛び込んで來たは奴の不運だグッ〳〵云ふより身ぐるみ脱て往なら生命ばかりは助けて遣る夫とも厭だと思ふなら息の根止めて呉るから覺悟しやがれ」扨は山賊なりと思ひましたから三人や四人の者が出たつて驚くやうな正雪じやアありませんカラ〳〵と打笑ひて　正「我れも天下の武藝者だ夫しきの事に驚いて諸國修行が出來ると思ふか切り込んで來る奴をヒラリと交し空を打たせてウーンと當身を入れたから堪らないバッタリ其處へ倒れて仕舞つた　△「俺れ三一侍先刻も兄弟分の首級を取りやアがつて

今又阿兄を殺しやがつたサア斯うなりやア怨重なる仲間の敵だ逃るとて逃そうか」と兩人等しく切つて懸るを正雪は不審ながら也左右に投飛ばし　正「ヤア推參なり盜賊共首級を取つた抔とは身に覺へなきこと人違ひ致すな」と問つめられ二人の者は恐るゝ〳〵正雪の前に兩手を付き　兩人「何をお隠しヤましやう素より俺は此山中に住む盜賊なれど仲間の者が二人して今から二時前ばかり此山の半腹に網を張て居ると通り懸つたは未だ生若い武者修行克い鳥が懸つたと思ひ其旅人を劫うとすると返つて一人は撃れて仕舞ひ其の上首級まで持つて行かれたが逃返つた一人がコレ〳〵と注進に及びし故ッコデ三人追懸けて參ると出合頭に通懸つたは貴郎様大分お腰の物も立派だし夫に武者修行の打扮故何ちになつても損はねいと夫れで無禮を致した譯真平ご免下さいまし」と異口同音に謝入を正雪は聞了り　正「扨は件の武者修行

と云ふは先刻咄しに聞たる者ならん去れば未だ遠くは行くまじ好き手懸りを得たりと心中密かに喜びけるが思ふ仔細をば色にも示さず……人違ひとあるからは是非もなきこと此儘免して遣はそうゲレども山賊抔の稼ぎは今日限り止るが宜いソウして江戸表へ出て兎も角も世を送るが宜い我れは由井民部之介橋正雪と云ふ者聊か思ふ所もあるから後からして江戸へ往き再び面會したる上克き商業でも致そう之れは少しだが當座の手當として遣すから別るが宜らうと懐中より取出したる金子、山賊共は驚いたねい　山賊「命でも取る。と云ふかと思つたら量見を改めて江戸へ出ろ俺も後から往て何か宜い商賣を始めやうッて……」不審ながらも恐る〳〵受收め　正「夫じやア今言つた通りブッツリと山賊稼ぎは止が宜いぞ……と云つて悠々立去らうとする、山賊「アヽ若し〳〵旦那一寸待てお呉なせい　正「何だ待とは用でもあつ

てか　山賊「ヤア〳〵一寸待つてお呉んなせい俺共は斯うして命も扶かるやア金子も貰つたけれども兄哥は斯うして此場に彷徨出度くなつて仕舞つちやア賊に張合のねい咄し一ッ何卒柔術とやらの手で活すなうな工夫はありますめいか　正「イヤ〳〵其事も氣が注んではないけれども今半時も經つうちには息を吹き返して氣が付かから其時其方共がコレ〳〵云々と云つて克く咄して聞せるが宜い決して心配致すなと云ひ捨て只管走り行く其内に夜は益々更てシーンと致し只物すごき斗りの有樣處が道の傍を見ると杜の中に古い山神の祠がある余んまり腹も減たものですから暫らく此社殿を借りて休息致して參らんものと乘て用意いたしたる小鍋を取出し水を入れ薪を拾つて火を焚付け米をば袋より取出して煮ねるのを待つて居る……何だか斯う云ふと大層慾氣なことを伺ひますやうですが武者修行と云ふ者は樹下石上を

宿と致し強ち宿屋ばかりへ泊る譯の物ではありませんから何れも糧食の用意と云ふ物はしてあります夫れだからナカ〳〵武者修行に出るといつては命懸けて辨慶の七ッ道具どころではない鍋から米は勿論の事劍術ならば袋竹刀の用意もあるし雨の時の支度もしてある一切合切自分の躰へ附けて居るんだから道中するつて隨分難義なものだ……スルと程なくバタ〳〵ッと云ふ足音が聞ゐる　正「ハテ不思儀な事だ今時分此山中へ來ると云ふのは殊によつたら先刻咄しに聞いた武者修行の侍にはあらざらんかと火影にすかし眺むれば案に違はずキリ〳〵としたる身拵へ紛ふ方なき其人ならんと思ひければ密と社の後ろへ隱れて仕舞つたソーして樣子を見て居ると件の、壯年は何やら焚火いたして居るを不審に思つた樣子大方山賊共の業だらうと見向きもせず社の内へ遣入つ仕舞つた暫らく經て又出て來て社の右手にある板

の下へ參り頻りに穴を堀て居ります此有樣を篤と見澄したる正雪に於きましては拔足差足密かに社の内へ忍び入り四邊をかゝつて見ると何やら手に觸るものがあるので見れば生々して男の首だ正雪は打笑みつゝ件の首の髻を提げ穴堀り果てゝ立揚らんとする彼の武士の振向く面をねらひ　正「曲者待て……」と呼かけ丁と擲うつ首の礫アワヤと驚く壯年は身を沈ませ乍ら扳討に首を斬拂ひ祠の樣を飛下りて程よき處に衝立つたる正雪を見返り怒れる聲を振立て　武「ヤア奇怪なり曲者呼ばゝり我大願の妨げをなしたる汝こそ曲者ならん覺悟いたせ」と詰寄たる其身拵ひの法に適つたることと寸分の隙もない侮ゞ難きをック〳〵と見澄し一足後へ飛退き　正「アイヤ暫らく待れよ問ふ事あり貴殿は昨夜大聖寺の山中に宿を求め戯れに彼の玉味噌を切りたりし武者修行にはあらざるか」と問はれて驚く件の武士　武「如何にも某に相違

なけれど和殿は又如何して其れを知り給ふか」と問返されてニヤコと笑ひ「正實某は今日彼の家に息ひて圖らず聞き及んだる貴殿の擧動武藝の程も思ひ遣られて未だ見ぬ友の懷かしく斯は追懸けて參つたる譯某しとても武藝の道は好むところ沙窟の通り武者修行の一人なれば其業未熟なるにもせよ切ては一太刀試合を願はんと沙跡を慕ひし某名乘るもおこがましくいへ共駿河の住人由井民部之介橘正雪とやすもの貴殿は何國の何方にて何と名乘らせ給ふか若しからずは聞かせ下さい」と慇懃に問ひかけられたる此有樣に拍子抜のしたる武士は刀を鞘に納めつゝ「武

某し事は相州小田原北條家の浪人にて金井民五郎政國とやすも幼年より武藝を嗜なむ所から終に武者修行となつて廻國いたし經廻りたりし國々へは首塚を一ッ宛築かんと云ふ大願を企て其今も此處に一ッの首を埋めんとする處を思はず和殿に妨たげられたり某當年十六才武藝の程は未熟なれど互ひに修行の身の上イザ相手致さんお支度あれよ……」物騒な人間もあつたもので國中へ一ッ宛首塚を拵らへると云ふ願ひだつて……ソンな事には拵はない正雪は　正「心得たり然らば今かけ於たる鍋の飯の煮る迄に勝負を決しやさん」と突然腰なる大刀を抜放め立揚るを民五郎政國も全じく聲を懸けヤッと云つて斫り付ける……烈い奴があつたもので眞劍勝負だ幾ら武者修行だからと云つたつて眞劍勝負とはギョッ〳〵しいが茲が正雪の氣量のある處で怒じ袋竹刀などを出して試合をするよりは第一先方の膽を奪つて呉やうと云ふ謂はゝ呑で懸られて居るんだから堪らない民五郎も正逆に眞劍勝負ではなからうと思つた處へ向ふから白刃を以て懸られたから暫らく待て呉れとは言はれない慈や命がけです「エイヤッと云ひさま稍半時ばかり闘つて居る折しも件の鍋の飯

がッ〳〵蒼ねたつて來た夫れが爲め緩もアハヤ消ねんと致し
ましたので　正「アイヤ暫らく〳〵……」民五郎も退いて互に乃を
納めましたが　民「寔に和殿の藝術ナカ〳〵感服いたした去り乍
ら今日の勝負に於ては最初は拙者氣後れを致したが詰りは七分
の勝では座らう」鍋を下し乍ら正雪は此一言を聞き片頬に笑をう
かべ　正「シテ又何か目印しにても着置れしにや、」民「去ればさ失
礼ながら和殿の左の袂を見給へ三太刀切裂いて置いたれば之ぞ
勝を制したる証據で御座る」正雪は驚いて袂を反して見ると成程
三段に切れて居る　正「イヤ仰せ通り三筋に袖の切れたるは正に
承知いたしたなれど七分の勝とは思はれず其証據とヤすは某も
亦貴殿の襟に印を着おいたれば……　民「ナニ某しの襟に……と
手を差し伸て首の處を見ると驚いたチ何時か笄で頭を三針程縫
れて居る扨は和殿の武藝は迚も某如きの及ぶべき處にあらず此

笄を以つて縫れる際には幾太刀にても切り付る事を得べし天晴
れなるお手の内と頻りに感嘆いたし乍ら笄を添へ〳〵しく返す正雪も
禮を厚くして　正「イヤ〳〵勝敗は時の運一本の試合で強い弱い
の論は立てられぬ譯然るを過分のお褒めで赤面いたす」と云ひ乍
ら笄を請取り只見ると豈圖らんや白銀拵らへの簪だからサア正
雪も不思議に思つたが何しても考へ出せない何時摺り換へられ
たんだか更に分らぬ色々と考へる内思ひ出すは名張里の麓に
て彼のお染が危き難義を救ひし時如何なる譯か情を含みし有様
其時は知らぬ顔に過したなれどハヽ扨は其心であつたかと考へ
は付たけれどコンな懶氣を云ふ譯には往かないから其儘鞘に納
めて置く民五郎はいよ〳〵敬い固く正雪の辭するを強て師匠と
頼むッコで師弟の約束を結び山神の祠を拜して生死を共にせん
ことを誓ひ丁度飯も熟たから　正「サア一杯お交際なさい　民「之

は結構添ないと云ふ譯で一ッ鍋の飯を喰ふと云ふ譯此時兩人は食事を了り　正「某しは少しく思ふ仔細もあれば遠からずして江戸へ參るが貴殿は如何では座るか」と夫とはなしに問ひ掛ける

民「某しとても仝じこと諸國を經廻り必ず江戸にて再會いたさん去れど修行は獨り旅ころ未練なくして宜しいと思ふ故兎も角も此場はお分れ申すと致そうと其夜は祠の中に休み夜と共に語り明して翌る朝別れ〳〵に出立する之より正雪に於きましては中國路へ道入へ播磨から四國へ渡り九州に赴き肥前國唐津より天津島へ打渡り小柳の瀬戸より上陸いたしましたがイヤ景色の好と云つたら恰がら畫にもかけぬ位遠方此方と經めぐる内但ある松の根方に六十路あまりの一人の老翁大公望氣取りで頻りに釣を仕して居る正雪も只人ならずと思ひましたにより　正「アイヤ夫なる翁大分お樂しみで御座るな……釣のお慰みで御座るかな」

二三度繰返して云つたけれど都さん默つて居やからア正雪も黙に障つたと見て何とも言はず傍に突立つて見て居ると漸くの事で振向いた　翁「エ、騒々しい其處に居て彼之れ云ふもんだから可惜餌を取られて仕舞つたモッと靜かにするが宜い」正雪も仕方がないから何とも云はずに默つて居たが正雪天草島へ渡ると云ふは抑も如何なる仔細のわつての事か又此翁は果して何者なるやは一喫いたして辨じます……

第五席

正雪の天草島へ渡つたと云ふのは一躰此時分大坂方の浪人が多くは此島へ遁れたもの夫れ故天草には武術に長た人物が幾らもある夫れを知つて居るから遙々此處へ尋ねて參つたなれど誰と云つて知つた人もない、據ところないから釣をして居る老人の側

で見て居ると突然劔突を喰はされた、ケレども此翁尋常一般の人物ではないと云ふ事を見込んだる事なれば何と云はれても默つて釣のを見て居ると氣の長い譯のもので二時ばかりの間に一尾も釣ない、夫れでも爺さんだつて悠氣だね一心に水面を睨んで居る蟲がて日も暮方になつて參つたから件の翁は徐々と釣竿を納め神ゆく船を眺め乍ら

諧「わらおもしろの眺望やな〳〵心づくしの海原に……」

諧をうたひ乍ら正雪に向ひ

翁「如何に壯年今彼方を走るアノ船を覆へすには如何なる手術のあるまとか意見があるなら聞きたいものじや」正雪は悲々しく兩手を突き

正「今彼れなる船を覆へさんに素より手間隙の入る可き程の事にはあらず」

翁「然らば如何致すぞ」

正「ヤすも愚かや我克く万里の波濤を渉たり三尺の劔を揮つて直ちに滿船の者を切盡し船を奪つて仕舞ふ時は沈めやうと浮めやうと心の儘になり」

翁「アハヽヽ愚か〳〵……」

正「ナニ愚か……怪しからん事を……」

翁「怪しからうが怪しかるまいが之ぞ匹夫の勇と申すもの匹夫の勇には限りあり汝が如き白痴は只管血氣にのみ逸るのみ斯ては武術を勵むとも終には身を破るの禍となる去れば生兵法大疵の基、之を頂だいて生涯人の後に付き決して人の前へ立つまいと斷念ろ」と云ひつゝ自分の窄て居た草履を右手に取つて丁と投付ける武術の心得ある正雪なればヒラリと躰を交したが無禮の奴があれば斬るもの釣を仕て居るのを見て居れば劔突を喰はせるし揚句の果には草履を以つて武士の面躰に投付んといたす容赦ならず俺れ覺悟ッ……」と既に飛蒐らんと致したが

正「イヤ待て〳〵昔し韓の張良は地下に於て老人の草履を捧げし試しもあり我慢するのは此の處だ」と怒りを抑へまして草履をば兩手に捧げイザとばかりに返しました

此時翁は正雪の振舞を篤と見すまし面を和らげ翁「如何に壯士那の船を覆す手術と云ふは我方寸の中にあること見れば其方の魂は見揚げた處あり兎も角も我庵へ參れ」と之から正雪を同道し翁は先に立ち木の根岩角の厭ひなくヒタ〳〵駈て行く其早いッて早くないッて正雪は息を切つて追懸けるが惡くすると姿を見失うやうな譯嬬て怪しげなる庵がある之れぞ翁の住居で沙座います座定まつて後翁は正雪に打向ひ翁「先刻は少しく思ふ處あつて無禮を働き和殿を試みたが克く一旦の怒りを忍び已れを抑て事を成す大丈夫の魂感服いたす夫れ故見すばらしき此住居ながら斯は餘いヤた譯シテ沙身は何國の者にて又如何なる望みを起し斯は遊歷いたさるゝか包まず仔細を物語られよ正ハヽア某事は駿河國由井の里に生れたる由井民部之介橋正雪とヤすもの生來武藝を嗜む故斯く武者修行を致すばかり外に望み

も沙座いませねど天草島には武藝の達人多しとの噂夫れ故切て翁は名人に逢ひ尚も奥儀を極めたき望み沙見受けヤせば翁こそ斯く漁を以つて世を送るとは云へ世の常なる漁師とも思へず苦しからずば沙姓名を……翁「アイヤ正雪殿とやら思ひ内にあれば色外に顯はれる身は武術修行の望みありと云へど夫れは表て立ての事心の奥底は夫れしきの事にはあるまい翁は既に之を察つしたがマ兎も角我が胸中より打明しヤそう嗚呼がましき事ながら某事は薩の小西掘津守行長が老党にて左る者ありと知られたる森宗意軒とは我事なり物語るさへ遺恨の事ながら我主君行長公は去ぬる慶長の一戰に敗北しは生害の際に某しを招き今度味方不運にして今日滅亡いたすと雖汝は一度此場を落延び時節を待て味方を集め我弔合戰を起し誓つて天下を覆し修羅の亡執を晴らして呉れよと臨終の際の沙遺言は骨に刻み膽に銘して忘

れねども未だ之と云つて頼む可き英雄を得ず斯く空しく老朽て仕舞ひ今は望も遂する事出來ず遺言に背く申譯には此腹を掻さばき相果るより外なしと思へども何思ひ兼て歎息の中に月日を送るは如何にもして天下の豪傑に逢り合ひ已れと同志の者あらば一味になつて事を起さんと思ふ中天も孤忠を憐れみて今日圖らず和君に出逢ひ克く見る〳〵に尋常の壯士にあらずと日頃の活易にて判斷し熟々人相を見るとあろ豈圖らん深く心に秘たる大望のある事を見破つたり去り乍ら未だ兵法の奥儀に達せざるは遺憾の次第因て密かに和殿を扶に我兵法の奥儀を授け終には和殿の手を借りて我宿望を果さん所存如何でゆ座る民部殿」と始めて明す宗意軒が秘密の宿望述懷に天下の豪傑森宗意軒殿にて在せしか亡君の志しを果さんと多年時節を待給ひし忠魂義胆恐れ入つたる次第且つは周易の奥儀を

もつて我相を占ない某が方寸を知りたまひしは實に天晴の至り何をか包まん誠に翁が觀察の通り小盗となつて人の寶を盗むより寧ろ大盗となつて國を盗む古來英雄の志をならひ如何にもして一度は將軍ともなり大名を後世に流さん望みは夙に企てたりなながら某は少しの武藝を修めしのみにて未だ三軍に將となり去手足を使ふが如く克く千軍万馬を自在に扱ふ兵法を知らず何卒翁が丹精を仰き兵法を成就いたせば仮令お頼みがなくとも此志あるからは遠からず旗を揚げ武運めでたく事を遂たる曉には自然翁の望みも叶ふと申すもの敢へを頼む」と坐をすべつて三拜九拜しての頼み素より宗意軒は望む所の事では座いますから大に悦こび之より正雪を庵に止めて夜となく日となく心を盡して兵法を授けましたが敢ねる者も敢はる者も古今の英傑では座いますから僅か一年半ばかりの間に悉く奥儀を極めました之で以て

悉皆文武の仕上げが出來ましたに依り　宗「何時まで居たところで詮のないこと一日も早く當地を出發いたし早く大望を遂げるやうに致せと云ふ事正雪も永の月日厚き教導に預り且ツは斯く迄寢食と共に致し師弟の契りが深くなつて見捨るとは又其情に離されまして中々出立の出來兼るもの、宗意軒も名殘を惜むと雖何せ一度は別れねば相成らぬ事故心を勵まし　宗「サア何時まで、返留しても別の悲しみは仝じこと早々出立いたすが宜らう　正「然らば之れにては別れヲましやう隨分共に機嫌克く……　宗「其方も達者で……と互に涙を隱して見送り見返り正雪は中國路へ渡り那れから京都へ這入つて暫らく逗留いたし中仙道へと心差し美濃、國に青野ヶ原へ差懸りますに折しもあれ圖見れば一人の虚無僧が並木の松の下枝、周り二尺もあらうかと思ふのを足つま立つて手を掛けメリ〳〵と捻折つて松葉をば地上へ敷き其上へ座つ

て天蓋を傍へに置き腰なる烟卿を取出し悠々と足の疲勞を休めて居る正雪は小蔭におつて此有樣を見　正「恐ろしい怪力の虚無僧だナア那の大きな松の枝を折べしよつて仕舞つて其松葉を敷て胡座を掻て居らア定めし腕前も確かなものだらう一ッ試して見て遣りたいものだとヅカ〳〵と虚無僧の前へ參り　正「之は々珍らしい敷物があるものかな併し之れでは俗に云ふ針の莚に座るやうな心持がいたすから是より尚座り心の克い此敷物は何でも座る」と件の男の胡座を掻いて居る膝の上へ動乎と腰を懸けました虚無僧は呆れて仕舞つた。虚「何が無禮だと言つて人の膝の上へ腰を掛る奴もねいもんじやアねいか忌々しい奴だウム斯して呉れん……と突然標頭をつかんで目よりも高く差上げ微塵になれと投付けました、投げられ乍ら正雪は宙に於てヒラリと身を飜し松の木の下へ屹然と突立ち　正「アハヽヽヽ修行者……修

行者拙者は茲に居るんだ汝は如何程の怪力があるとも用ゆる法が拙なければ之れ只牛馬に等しき物殊に夫れしきの力を自慢に致す杯は片腹痛いと飽まで嘲弄いたす不敵の有様に虚無僧は益々怒り「虚」ヤア吸言たり山賊共イザ其腮を引き剖き呉れん……と松の枝を持つて打つて蒐るをシホらしやと正雪は例の手並を顯はし扳脚したる刀の雷電前かと見れば後石に顯はれ右を拂へは左に在る一進一退飛鳥の如く水に浮べる月形の目に止る事も出來ない流石の修行者も手足が勞れ思はず後へ撞と倒れモハヤ息も絶々で沙座います正雪は斯と見るより手早く水呑みを取出し四邊の清水を汲で參り「修行者氣を確かに持ち給へ……と胸へ手を當てヤッと活を入れた「虚」ウーン……と息を吹き返したる事故「修行者心持は如何にや」「虚」無僧に只眼ばかりキョロ〳〵して居た鳩が豆鉄砲でも喰つたやうだ正雪はニタリ笑

つて「正」修行者何もソウ驚くには及ばぬ事某しは由井正雪と申す諸國武者修行の者、先刻圖らず貴殿の力扱群なるを羨ひコハ好き相手と思ひ故意と名乘りもいたさず無禮を働らき實は圖ひを挑みし譯枉て無禮の程は免させ賜へッヲ又最前より貴殿の勸酒を見るとあろ身は優婆塞の姿にやつし給ふといへど眞實修行者では沙坐いますまい願はくば何國の誰やら姓名來歴を明し給へと問ひ懸けられて修行者はギックリ胸に當る事があると見ねツク〳〵正雪を打見やり聽て形容を改め「虚」自身自ら名乘る上からは某どても何をか包まん別木平之進と申す浪人者父は別木喜右衛門と呼ばれたる者なれど大坂方を浪人してよりは江戸へ參つて仕官奉公いたさんものと某を伴ひ元和七年の十一月であつた遥々と參つたとあろが仔細あつて父は若州小濱の城主酒井讃岐守が爲めに殺害せらる其時某十五才無念骨髄に徹し是非共一

太刀恨まんと心を盡せど何を云ふにも先方は大名此方は取るに
も足らぬ浪人者蟷螂の龍車に向ふと全じこと自ら命を落すも悔
て返らぬ事と身を戒め時の至るを待つて居ると待てば海路の日
和とやら芝三緑山増上寺に於て一萬部の讀經のあつたせつ當日
將軍家の御名代としては酒井讃岐守登山いたすとの事之あそ天
の與へと大に喜こび當日の樣子を聞合すにナカ〳〵用心も嚴重
で座いましと當日限り女子の外參詣を禁ずるとの事だが之を
聞た某の殘念さ千歳の一遇たる又過ひ難き此日を過しては何れ
の時か出逢う事が出來やうと女子の姿に立扮ち用意の懷劍を藏
し持ち今日こそ敵の首を打落し父の尊靈に手向けんと首尾克く
寺内へ忍び込み今や仇の至るかと待間程なく擂いだす一番鐘は
鐘撞の先拂ひイト嚴重に守護せられ酒井讃岐守には靜々と入り
來るが何を云ふにも一点の油斷なきこと故手を下すことが出來

ないコーハ我ながら憶した上下向の時には必ず本望を達せぬ迄も
切ては一太刀恨みんと思ふ處へ又々擂いだす鐘の音今度は松平
伊豆守參入りと云ふ先觸れだが何事にも拔目なき伊豆の守は何か
心に思ふ處やあつたりけん數多の婦人をズーッと見廻し我横顏
を怪しげに偵つと見て忽ち聲を懸けられ此參詣の女子原には曲
者の紛れ入りしと覺ればアレ搦めよと云ふお下知ハッと思つ
たがモー斯うなつては仕方がない諸方の門はピタリと閉て仕
舞ひ參詣人は一人たりとも出さない去れど通れる丈は通れんも
のと捕手の役人を突退け跳のけ圍をくゝり拔け御堂を廻つて茂
れる竹に攀登りヒラリと土塀を跳り越へ不思議と虎口は通れた
れど何を云ふにも其儘江戸表にも住み難く虛無僧の姿に身を變
し斯は浪々いたす譯胸中の無念さお察し下さいまし」と思ひ懸け
なき長物語りを腕拱ぬいて聞及んだる正雪は頭りに嘆息し共に

眼瞼を瞬たゝき　正「イヤ〳〵驚き入つたる貴殿の大量胸中お察し申す就ては武士は相身互ひ某一臂の力を添ゝ時至らば是非共本懷を達する助太刀を致さん去り乍ら敵は天下の老中なり逃れば反つて毛を吹いて疵を求ひる道理幸ひ某も仔細あつて遠からず江戸表に罷り越し永住いたす見込みなれば仇の樣子を覗はんには最とも好き便なり斯まで秘密を打明し腹藏なく相譚らう上は今日此處にて義を結び互ひに二つなき心を明さんと思ふが貴殿の思召は如何にや」平之進は容儀を改ため　平「之は又何よりの事某とても身が武藏の世に勝れたるを見て復讐の時力に余る事もあらば身の力を借んと思ひ實は斯々と密事をも打明たる次第然らば義を結ひ生死を共に致さん」と他事なき答へに正雪も喜こび之より兩人いたして清水に口を漱ぎ天地を拜して義を結ひ盃を立てました　正「斯くまで義を結んだる上からは貴殿に一

つ申上たき事がある　平「之は改まつたる言葉何事なりと……

正「イヤ外でも御座らん既に三緑山を騷がされ茲に四年の星霜を經るも姓名を其儘に致し置くは危うき次第にあらずやヨシヤ彼の折名乘らずとも尙安心しがたき處あれは何とか御改名になつては如何　平「成程御尤も千萬……と暫し頭を傾け別に之れと云ふ名案もは座らねど某し母方の姓は加藤とヤし名をいちと呼びたり我幼年の折世に亡き數に入ればたれば顏さへ碌々く知らざれど父より屢々其咄しを聞及んで居る去れば母方の姓名を取り父喜右衛門の右衛門を取つて加藤市右衛門と名乘らんと思ふが如何で御座らう　正「夫れは至極尤の至り殊には父母の姓名を名乘るこれ兩親を忘れざる孝子の擧動市右衛門こそ尤も然るべき事に存ずる」茲で悉く加藤市右衛門と云ふ立派な侍が出來上つた此時正雪を空を仰ぎ　正「最早暮るゝ間もなければ今宵は一ッ旅宿に

泊り何種々とお咄も仕たし承りも致しましやう」と之から両人は座を拂ひて青野ヶ原を出んとする正雪は御と傍へ寄り先きに立つたる市右衛門が袋の儘にて帯たる刀の鐺を丁と右手に取り騒を振り立てたる事にて〻正「ヤア〳〵愚なり加藤市右衛門汝が仇と覘う酒井讃岐守の間喋者なる某を知らざるか尋常に縄に懸れと呼はりました市右衛門はハッと思ひたれども更らに騒がす身を潜ましして取られたる鐺をヒラリと振解き袋の紐を解手も見せず振り返るさまハタと打つを身を開かせて正雪は及持つ手をッカと握り鐺許より刀尖まで打見やり莞爾と笑つて　正「天晴なる利刀夫れにまた貴殿が今の身のこなし假令天下の老中なりとも驚はたさんことと疑ひなしヤラ勇ましや」と手を解てカラ〳〵と笑ひましたので市右衛門も漸く安心した　市「イヤ感れながらも油断を戒しむるは身の親切添けなし」と禮を述べ之より致して両

雄士は道を急ぎ宿を求めて勞を休めました……

第六席

エ、伺ひまする前講の續き……正雪は市右衛門を伴ひまして青野ヶ原を離れ宿を求めて夕晩も濟みましたから四方山の咄しの序に　正「加藤氏貴殿も永らく江戸に住居なすつる由なれど當時江戸に於ては武藝者の師範としては誰が一番の遣ひ手と稱れますかな　市「左れば三尺の劔を揮つて蛟龍を切ること蚯蚓の如くなるは柳生飛彈守に及ぶものなく又六尺の棒を廻して彼の猛虎を斃すこと猫を斃つよりもイト容易きは阿部十四郎の右に出る者はなく又弓を取り馬を走らせ百歩を隔てゝ風に紮るゝ柳の條を射るにも我掌中を指す如く百發百中誤らざるは北條安房守に亞ものなしとす位ひ左り作ら此但馬守を左に阿部十四郎を

右にして安房守を殿といたし其中軍に將となり千軍萬馬を馳引すること心の手足を遣ふ如く百度戰つて百度勝つ天晴れ名將の氣量あるは江戸牛込榎町に住居を搆へたる楠正成が流れを汲みたる軍學兵法並ぶものなき楠不傳に及ぶものなしとは專ら世の取沙汰ばかりではなく之は實地の腕前あるもの倘其外にも自ら稱して吾こそ武人なりと誇る者はあれど之こそホンの一部の者の腕前取るに足らん輩でゆ座る尤も貴殿にして若し江戸表へ參られ道場をお開きに相成れば此四人の英雄を凌ぐに何條難き事あらん一日も早く彼の地へお出に相成つては如何で……正雪は楠不傳の評判を知らぬではないがトント已れの爲めに大望の利益となると云ふ事を心注んで居つた處へ市右衛門が天晴氣量人だと云ふ事を述べましたので不圖心注き楠正成が流れを汲むと云へば何よりの幸ひ一日も早く江戸表へ下り件の不傳に付き從

がひなば必ず好き便宜もあらんと獨り心に頷づき猶も何くれとなく問ひ明らめ夜も更けましたから共に臥床に入り眠りに就きました正雪は爰にて市右衛門に別れ再會を期して袂を分ち之から木曾地へ差し懸り日を經て越後の國にと道入り彌彦山へと差し懸りました、スルと杜の木影に客待ちをして居る一人の馬士が馬士「ヤアア旦那何せ歸へり路だ幾らでも宜、から廉價く乘てお呉なせい……エ旦那ッッ默つて居ねいで乘て呉れても宜しやねいか」と頻りに勧めますから正雪は振り返つて見ると普通の馬士とは違ひ一癖ある可き面魂　正「ハヽア之りやア又山賊の輩が馬士に化けて居るんだな何しても一癖ある奴に違ひねいが俺れ何程の事があらんや一ッ腕前の程を試みて遣らうと思ひましたに依り……馬士「へイ……乘つて下さいますか　正「乘つて遣はそう駄賃は北方の盜む丈け出すが方外の事は叶はんぞ　馬士「ヘイ

旦那様乗つてせい下されば何も文句は申しません空駕で歸るのも詰らぬい譯だし旦那の下さる丈賃錢は頂戴いたしやす」と之から手綱を取つて煙管をくはへ馬の鈴をチャラン〳〵めかして行く、二三丁も來たかと思ふ頭忽ち藪陰より各々山刀を横へたる二人の瀧者現はれ出で件の馬士に目配せ致すと馬士は突如轡を取り正雪を仰ぎ見ながら馬士「ヲヽ客人此處は定めの立場だサア降りてお呉なせい　正「ヲヽ左様か……コラ馬士よ俺は何やら酒にでも酔ては居らんか克く考へて見ろ未だ乘出してから三町にも足らぬ處冗談も程のあつたもの开な事を云はないでサア疾く引いて呉れ」と言葉しとやかに述べますを立塞つたる二人の大男両人「ヤイ侍ッテ〳〵しい事を吐しやがるねい俺れ達は此の處へ鐵筋入の腕をもつて網を張つて居る關所同前の處だ此處を通るにやア手形の代りに裸体になつて路用の金子は勿論の事衣服大

小身ぐるみ置て往くが宜い夫でなければニッとねい命を貰うんだサア厭か應かの返事をしろ」馬士は頻りに領ずき乍ら　馬士「成程其れは客人此場へ差し懸つたのがお前さんの不運だ犢鼻褌一ッの恵恩に預るのが僥倖の幸ひと云ふ位ひ命あつての物種なれば諦めて裸体になつて仕舞ひなせい　両人「夫れが惜りや命はねいぞ……」と三人して詰寄せる正雪は之れを聞いて態と震へ恐れ正「モッ斯うなれば是非ないと然らば路用より先へお受取り下さい……と腰なる巾着より三文の錢を取出し油斷をなしたる三人の面上を臨んで　正「エイッ……と打つたるは早速の礫癖者共は不意を打たれて　三人「アイタ……と何れも額に手を當て暫し茫然として居る其隙に正雪は得たりや應と鞭をあてゝ馬を奔らすを件の馬士は大に驚ろき　馬士「ヤア旅人馬に乘て逃るとて何で遁そうや其處動くな……」と云ふより疾く韋駄天の如くに蒐け

出し馬を引止んとする正雪は縦横に馬を乘り廻し元來し道へ引き返すと馬士も又追かけて來るが幾ら馬を走らしても如何して も追付かれる　正「扨々不思儀なる奴もあつたものかな之も又一蹴の内だ後には何かの役に立づかも知れぬ」と思ひましたに依りヒラリと地上に飛び下りると跡の二人も追ひすがり前後より斬て懸るを物ともせず身を開ひて左右の襟領を取り右と左に投げ飛す其間に馬士は仕込杖の刀を抜き放ち　馬士「ウヌ小癪の腕立を仕やがる覺悟しやがれ……」と眞向に振り冠つたる事にて無二無三に斬り付けます正雪は二三度追り過し足を揚げて腰の邊をハタと蹴るヨロ〳〵と蹈蹌ところをウーンと突き退たから堪らない捏と尻餅を搗いて仕舞つたゆへ　正「ヤア山賊共不禮なる事を致すな今劔戟を取つては天下に敵なる由井民部之介橘正雪を知ざるか汝等一々首打落して思ひ知らす可き筈なれども我思ふ仔

細もあれば命丈は助けて遣はす一体何國の何者たるか一々名乘つて素性を語れ」と大音に呼ばりたる事なれば三人の山賊も威風凜々たる正雪の有様を見て膽を潰して仕舞ひましか　三人「ハヽア恐れ入りました他達三人の者眼があつても節穴全然斯る英傑のお方と存せず誠に無禮を致しました何卒此儀は幾重にも御容赦なすつて……　正「左れば素より助け難き者なれど少しく思ふ仔細あつて命丈は救して遣ると申したではないか夫なことをすより早く名乘つて聞せるが宜い」此時馬士は面形を押すばかりに頭を地に摺り付け　×「私事は甲州武田家の浪人熊谷三郎兵衛と申すもの　△「手前は全く坪内左司馬……　三人「斯う云ふ事を仕て世を渡りたくも座いませぬど何を云ふにも浪人者の悲しさ職業とても無い處から切り取り強盜は武士の習ひと詰らぬ所へ理屈を付け今では山賊稼ぎに世を

○「拙者は有竹作右衛門

送る天下の罪人では座いますが今日馬をお勧めしたは如何にも粗忽の次第悔んでも返らぬ事左りながら之れ迄の悪業はツツリと思ひ切り天下の良民となります故命は何卒お赦し下さい

と誠心見なし言の葉に正雪は打頷づき　正「ホヽー名乗つて見れば立派な武士だけあつて過を改むるとは天晴れなる志定とに勇ましい事だ、弥々悪心を飜すに於ては我も亦言ひ甲斐のあるとヤすもの必ず後來を戒しめるが宜い……就ては三人揃ひも揃つて斯る山賊と迄成り果たが夫れでも何か得意な技があるだらう劔術とか槍術とか……何だ三郎兵衛とやら其方は大総走るのが早いやうだが何か武藝の心得はないかな　三「ヘエ誠にお恥かしい事で別段武藝の方は左したる事もなく未熟では座いますが仰せの通り走るのが第一番の達者で一日四十里位は一息で参座いますす　正「ホヽー何れでか馬の駈るより早いと思つた何だ滝車と競争しては一等賞の金時計だぞ」正「逆此時分に滝車も開けては居りますまいがナニシロ四十里の道を一息に駈け通すといふんですから随分足の早いのでは一等賞にありつけましやう……正「如何だ左司馬其方の十八番は來ちやア言はずにや居られぬい」跡の二人は　二人「又鸚鵡が喋舌るナ　正「マア〳〵默つて居れ何が其方は得意だ左司馬……　左「手前の得意は物真似をする鸚鵡返し……　正「フム色々な得手のあるものじやな……　左「物真似をする鸚鵡返し……　正「ナニ……　左「作右衛門其方は何じや　作「ハイ手前のは誠に不意氣なことで　正「不意氣でも宜しい相撲か柔術か正逆に博奕ではあるまいな　作「ソンな事なら未だ意地な分で……　正「夫れでは無藝大食か　作「夫れよりは少し意氣なるとで　正「マア左様自烈さずにヤして見ろ　作「夫れは外でもは座いません楷行艸の文字を偽筆いたす

のが一能では座います其の麗り如何六ケ敷い字でも眞とうに書たのか又僞筆か決して見分の付かない程に妙を得て居ります

正「夫れは結構なことだ面白いではないか作右衛門不意氣ぞろではない天晴れな腕前だ……ケレども如何なる藝といへども只口ではばかり私くしは上手では座い名人で渉座いとヤしたところで實地を見なければ譯の分らぬもの三郎兵衛の早足は只今馬と競爭いたして存じて居る跡の二人は未だ脱前が分らんから之にて相試さん僞筆に巧みなりと云ふ作右衛門とやら先づ其方から試そう近う參れ」と言ひつゝ腰なる墨斗を取出し懐紙の皺を伸し正雪先づ筆を取りて大字もあれは細字もある行書もあれば楷書もある四行ばかり認めて　正「作右衛門此迄りの僞筆を致して見せい」ハッと云つて作右衛門は暫らく正雪の筆跡を見て居ましたが　作「ナニ之れしきの事は造作も渉座いません……」とサラ〳〵

と認め正雪の前へと差し出す正雪は之れを受取り自筆の物を比べて見ますと如何にも能く出來て居る一寸見ては何地を自分が書たのだか分らん位又二枚の紙を合はれ透して見るところ一字一点の大小も無く恰がら一枚の物に似て居りますから正雪はポンと膝を打つて感心した　正「如何にも好く出來た天晴なる僞筆の達人……僞筆の達人と褒められたんとや余まり嬉しくもは座いません次に左司馬を呼で　正「左司馬來れ……

左「ヤヨ戯むれるな左司馬疾く來れ……左「左司馬來れ……左「ヤヨ戯むれるな左司馬疾く來れ……一言一句の鸚鵡返し抑揚と云ひ音聲と云ひ全く已れが咄しを致して居るかと思ふ斗りだ斯う云ふ奴を連れて來て噺家の仲間へ入れ聲色一点張りで講座へ上らしたら隨分旨い聲色遣ひが出來ましやうが此頃は未だ寄席などゝ云ふ結構なとゝろは出來ません物と見ゐて渡世に困り山賊と迄落ちぶ

れて居るは氣の毒な譯……正雪は此れを聞いて呆れる程驚いた正「揃ひも揃つて出來そこないの人間が集まつたものだ……」と思つたけれど色にも顯はさず何いたせ斯ういふ輩を俺れの手に慣付けて置けば決して損はない天下に事を擧げる時に必ず一廉の役に立つものと思ひましたにより　正「扨々三人共に面白い得意のあつたものだ就ては吾れ近々に江戸表へ登り聽ては大名を驚かすに依り其時は早速尋ねて參るやうに決して惡しくは取斗からはないから……」三人「委細承知仕りました仰に從ひ必ず山賊の如き業は止にいたし之より江戸表へ參りは名前を天下に揚げたとき早速伺うやうな支度でもいたして居りましやう」と之より正雪は三人の者に分れ越後路より取つて返し下野上野より江戸へ這入り之より楠不傳に取入るのお咄し例の次席に於て詳しく辨じます……

第七席

之よりは暫らく楠不傳の傳記に移ります……正雪も非凡なる人物では御座いましたが元々此楠不傳と云ふ人がなかつたなら迚も一時に廣大な道場を構へ牛込榎町に於て由井正雪と云ふ名を顯かす譯には參らなかつたものの全く不傳を玉に遣かつて忽ちの間に出世いたしたので終には大望を起して夫れ〳〵の手筈を致し一時天下を騒がしたやうな譯で御座います爰に江戸牛込區榎町に廣大なる屋敷を構へ數多の門弟を取立て其勢ひと云ふ者は諸侯方にも劣らぬ程の暮しをいたし軍學兵法の指南を以つて名を顯かしたる楠不傳と云ふものがある元之れ河内國道明寺の領主なりし楠次郎右衛門の分家で不傳は四十路あまりの人物妻の貞衛は疾に世を去り一人娘の小万と云つて今年は十七の娘盛り

元來此不傳には女一人で男の子と云ふ者がありませんから女房には甥に當る和田主水と云ふ者を養ひ之を牛込神樂坂なる不傳の下屋敷に住はせましたが未だ二十歳未滿の若者で座いますから小万に配偶るには早い兎も角も言號けとして主水の武藝も上達いたしての上夫婦に仕やうと不傳は夫れを樂しみに成長を待つて居た處が茲に一ッの騒動の起る源因と云ふのは楠家に若党を勤めて居る鶴野の九郎右衛門と云ふ者がありまして深く小万の色香に迷ひ好き折もあつたなら思の丈を口説かうと忍々に様子を伺がつて居る懇に上下に隔てなし思案の外とも少すのですから隨分昔から夫れが爲めには親の目襖を忍んで手に手を取つて欠落を極めこみ梅川もどきの落人を致す不心得の者も座いますから迷ひ易きもの尤も意馬心猿とやらかしますよ……九郎右衛門は召使の身でありながら大膽にも不傳の娘小万に懇をして或日の事主人の留守を伺ひ様子を見れば幸ひ四邊に人もなき故物をも言はず小万の部屋へ參り兼ねて他れが何時の間にか細々と認め置きたる文を取出し袂へソッと入れて逃げ出さんとする小万は驚き起ち上りさま伴のみを取つて九郎右衛門の面上を臨んで投げ付け

小万「無禮の事を致すな九郎右衛門妾には主水と云ふ言號の夫ある身殊に其方の爲めには主ならずや身の程を知らぬ白痴者奴疾く退れ……」と白眼み付けました併し男も斯う恥をかゝされると ズント度胸の据はるもので九郎右衛門は振返り乍ら冷笑ひ九「言はれずとも其の位の事は承知して居る不義と知りつゝ云かけた其言葉を反古にせず色よい返事をして呉れずは幾ら若党の分際でも一匹一人の男子では座る時宜によつては刀に懸けても思ひを遂げずに置くべき歟と刀の鯉口を寛げて威し懸けたる色

慾煩惱小万はいよ〳〵腹を立ち奥の間差して辿入らんとする聞の襖をさつと開き思ひ懸けなく立出でしは主人の不傳イッの程にか歸り來り爰にて始終の樣子を立聞きを致したのだからサア怒つたの怒らないの　不「ヤア丸郎右衛門奇怪至極我は口の破れを厭ふ故汝等と問答は致さん覺悟ひろげ」と云もあへず辿んと致す丸郎右衛門の領頭つかんで引き戻し忽ち庭へ吊り出して下奴を招び繩を取ちせ松の根方へ繋ぎ止め　不「生し置いては後日の妨げ手討に致す覺悟いたせ」と既に討果さんとする折しもあれ俄かに玄關に於てドサクサ大騒ぎだ不傳は之を聞き付け　不「何だ那の噪ぎは……と不思儀に思ひ急き玄關の次の間より樣子を伺へば這は如何に武者修行の者と覺しき打扮のイト精悍しき年未た若き一人の武士をば譯は知らねど若党下奴が追取圍んで手捕にせんと叫きさけび頻りに打合いを致して居る此時件の若者は

怒れる聲を振立て〳〵　壯士「ヤハ無體なり下郎共拙者は當家の先生の高名を慕ひ遙々尋ねて來たものを妨げなさば目に物見せんと孰圍ながら刀の柄に手を懸ける若党下奴は更に驚かず　下郎「アハ〳〵盗人たけ〳〵しいとは手前の事だ誠先生の高名を慕つて來たならば何故尋常に玄關へ來ねいんだ庭の生垣へ身を寄せて内の容子を窺うかゝは察する處當家の内に今混雜のある隙を窺ひ物を盗まんとの心ならんサア眞直に白狀して仕舞へさなくば尋常に縄にかゝるかと口汚なく罵るを壯士は暫らく聞き終り　壯士「爪田に履を容れず梨下に冠を正さずと云ふ世の戒しめのある通り我れ表立つて案内を頼むに斯く疑ひを蒙りしは始めて來れる當家の案内に暗らひからだが丁度内には何やら取込みのあるらしい夫れ故暫時事の鎮まる迄待て居やうと夫れで此處に佇ずむ間もなく又庭の中が騒しく罵る聲詫る聲手に取る

やうに開いたから開とはなしに覗いて見た夫れを怪しいと疑がはれるは尤どもだケレども身に一点の曇りなき某サア縄を打つて引立てられよ我れ先生の面前に於て明らかに言開きを致さんイザ……と覺悟の体に若党下奴も打うなづき下郎「ウム開は神妙だ早くソウ言へば何も手間隙も入らねいものを善も悪いも主人様の指圖次第俺達の一了見には行ねいんだから……と既に縄を打たんとする此時一間の内より不傳の聲として不「ヤア……其者早まるな暫らく待て下郎「ソラ先生のお出でだ……マア縛ばるのは待つて遣れ……此時徐々と玄關へ立出でたる不傳に於ては、不「之は……遠來の客人我は當家の主人に対して楠不傳とは其の只今若党下郎等が足下を捕へんとした事の起因は拙者此處にて茨より一伍一什を聞き取り居れば最早双方とも立てをするに及ばず又立騒ぐにも及ばない……客人には

先づ此方へお通り下さい」イザ……と勧められましたに依り彼の壯士は頭を擧げ主人不傳をツク……見るに年は四十路の上を越し身の丈高く眼する〻く匕首の短刀を鐺短かに横たへたる相貌に威おつて猛からずと云ふ容体なり其時壯士は腰まりて不傳の後につき從ひ奥まりたる小座敷へ通り主客の座定まりて初對面の挨拶も濟んで後ち恐る〻平伏したる頭を擧げ壯士「某し事は駿河國由井の里に出生したる由井民部之介橘正雪と申す者武藝兵法を好みます處から好き師に就き學ばんものと武者修行を思ひ立ちまして先づ四國九州中國より越後の果までも打廻り尋ね求めて居るとあろ未だ兵學に詳しき先生に出逢はず永の月日を旅路に暮し路用は悉く費ひ果し如何とも詮方なけれど尚志を勵まし下野上野を過る折から不圖承つたは先生の傳聞我國の兵法家と云へば江戸牛込榎町に傳座る桶不傳先生の上越す者な

しとの事夫れ故途中は飢を忍び木の實を拾ひ水を呑み氣を勵まして漸くの事遙々と推參仕りました願はくば拙者の心体を不愍に思召され下郎になりとお使ひ下すつて折々は指南なすつて下されば正雪如何ばかりか有難い仕合に存じます何卒寛仁大度の心を以つて許容下さるやう願ひ奉ります」と眞言僞言取まぜて、言葉巧みに述べますと、桶不傳に於きましては默然として聞き丁り心の中に思ふやう　不「扨は噂に聞いた正雪なるか彼れの、相貌を見るところ表面には篤實に装へども宛然眠れる虎に異ならずイト恐ろしき奴だ事そ之は遠ざけて於て止め置かざるに越した事はない」と肚の中で分別を極て仕舞つたから「コレは〳〵皺に折角の志去り乍ら如何にせん家の規約として若し内弟子を望む者は先づ三ケ年の間通勤の其上人物を確かめてからでなければ許さぬと云ふ之れは祖先よりの掟今更之れを改むる譯に

も往かず實に折角の事ながら足下一人の爲めにすると云つては之れ又使佑の沙汰にも及ぶまじと夫れ故何れへか宿を取り日々通勤した上にしてからにあらざれば内弟子の義は承引がたし悪からず承諾下さい」と嚴然として刎ね付けました正雪はシホ〳〵として忽ち、愛に望みを失ひ嘆息を吐いて思ふやう　正「道う云ふ頑固な人物だから一旦往んと云へば押して賴んだところで仕方があるまい當家の主人を慕つて來ると云ふのも何も兵法の修行をしたいからではない豫てたくめる心の大望、成就を圖る手だての基は當家に傳はる桶の系圖之れを奪ひ取らん爲であるが若し此事が叶はなければ之れ迄の苦心も水の泡如何かして當家に止まる工夫はあるまいかしらんと當惑の体に持なして嘆息して居る斯る恐ろしき心底とは神ならぬ身の知る由もなき主人不僅は正雪が頻りに望みを失ひたる面色を見て流石憐れを催し手を

拍つて女中を呼び何やらん囁やく間もなく處狹しと持出したるは山海の珍味、不傳は盞を上げ　不傳「如何に民部殿ッウ落膽なさるは女々しき事世に兵法家と呼ばれる者豈一人拙者のみならん此大都會には目に余る程兵學家も居るゑと、左のみ心配なさるな何はなくとも先一献お過し召され」と頻りに杯を勧めます流石の正雪も圖法思案に暮れて居るところへ酒を出されたから先づ之れで一ッの手懸りが出來たと思ひ會釋しながら盃を受け、之から遣つたり取つたり盞の數も廻り丁子のお代りもいたしまして色々軍學の咄しをいたします正雪とても軍學は既に天草嶋に於て森宗意軒から授けられた事ですから隨分不傳に負ぬ位では座います夫れ故談しは益々佳境に進みイッかは日も暮れて仕舞ひました不傳は余り酒量の強くない人ですから最果十二分の酔を發し席に拙られぬ有樣故

不傳「民部殿暫らく許したまへ且ッ日も

も物くたる事だから今夜は手前道場へ宿り明日は早朝に出發になつたら宜しからうアヽ非常に酩酊いたした」と最初の内は床の間の柱に凭れて居眠りを致し居りましたが其内に肱を枕に前後も知らずグウ〳〵と雷の如き鼾をかいて寢て仕舞つた正雪は不傳が酔つた紛れに今夜は泊つて明日早く立てと言はれたので輙の鮒が水を得たる心地いたし夫れより女中に案内されて厠に行きます廊下傳ひに庭へ參ると朧氣ながらも若党九郎右衛門は猶縛めの儘松の根方に縛られて居るをチラリと見たる民部之介橘正雪何か心に頷き一計を案じ出したものと見る跡から蹤て來る女中と見かへり　正誠に涉苦勞樣で座います……と云つて少し小聲になり「尾陋な事を申上るやうですが某しは誠に難澁な癖があつて持勢の爲め毎も長く掛るので困ります夫れ故茲にお待ち下さるにも及びません何卒彼方へお出下さいまし」と休よ

く斷はる誰だつて人の小用を足して居るのを待つて居たいものはあるまいから女中「左樣なれば免下さいまし……」と紙燭を借り其儘往て仕舞う跡見送りし正雪は厠の戸をピシヤン、カチン……と閉ぢをした音ばかりさせ自分は這入りませんで四邊に心を配る忍の進退紙燭を取つて袖にかくしフツと吹き消し樣側よりヒラリと庭に飛下り九郎右衛門の側へ近より手早く繩目を解き、正「コレ九郎右衛門どの斯うして見ず知らずの者が繩目を解ては定めし不審にも思ふだらうが某方とは由井正雪と呼ぶもの當家の主人樹不傳に怨みあるもの依つて之を擊果さんとザマ〳〵に苦心して今日は容子を覗ひに參つたところ先刻和殿の繩目に懸つたことより事の起因は垣の外にて立聞きを致した去り乍ら余りと言へば殘酷なる不傳の取計ひ傍に聞き居る某でさへ片腹いたき限り和殿の心中お察しヤす依つてッラ

考へるに命を全くして日頃の思ひを遂げんと思ふならば幸ひ只今主人不傳は酒に酔ひ倒れて前後も知らず眠つて居る此間に早く忍び入り娘小万を搦さらひ早く此家を立去つては如何に若し主人が目敏く我計略圖に當らず事難義に相成れば某密かに和殿を助けて取らせるサア否か應か返答如何に」と旨く正雪に說き付けられました素より思慮淺き九郎右衛門の事とて大に悅こび深く其恩義を謝せんとする取つては相成らん兎角妨げなき急に押止め　正「斯る場合に暇取つては相成らん兎角妨げなき内にハヤ用意こそ肝要で侍座る」九郎右衛門は左らばと斗り一議に及ばず精悍しく身繕ひに及び樣側の方を右見左見油斷なく小万の寢室へと忍び入りましたが之れから如何なるか詳しくは次席に……

不傳の娘小万に於きましては思ひ懸けなくも九郎右衛門の爲めに既に手込めに逢はんとして痛く憤うり恥しめて遣りました其間答を父の爲めに物影にて立聞きをされ終に九郎右衛門は庭に廻して既に手打ちに相成らんと致すところへ見知らぬ武者修行が參つた爲めに此れも中止になりトウ〳〵酒盛りになつて父不傳は痛く酒に酔倒れて仕舞つたに依り床を取り夫れ〳〵介抱して自分は房室へ退らんとすると樣側の戸が一枚明いて居りました

小万「ヲヤ〳〵雨戸が明いて居るよ大方女子どもが忙がしい紛れに忘れたんだらうと何心なく立出で鎖やうとする折しもあれ誰とは知らず面体を包んだる一人の曲者突然其處へ飛出しまして小万を小脇に抱きかゝへ樣を飛下り脱れ出でんとする此時小万は不意を喰つて吃驚したが必を落付け口を押へられたる曲者の手を搔退け

小万「父上……父上……ク……」

曲者が……曲者が……

道入つた疾く起き玉へ起き玉へ……」と泣き叫ぶ叱驚仰天いたしたる不傳に於ては岸破と身を起し承壁に懸けたる大身の槍を取るより早く鞘ばらひに及んだる事にて雨戸を蹴放ち大喝一聲

不「曲者待て……」と呼はります故曲者は驚き慌て逃るひまもなく座いませんに依り突如小万を膝に引しき左手に胸倉を緊乎とつかみ短刀を引き拔きたる事にて咽喉を目懸けて刎突を押あてたる火急の人質……ナカ〳〵曲者も慣れて居ます之れでは流石の兵法家でも仕方がありますまい……

曲者「ヤア槍不傳其處に居て我云ふ事を克く聞け若し一足でも近づけば直ぐに娘の咽喉を之れだぞズブッと一思ひに仕て仕舞うぞサア如何だと斗り斯う云つたんじやア解るめい克く彼面相を拜んで置け」右手を以つて頬冠りを取つて見せる……豈圖らん此曲者こそ宵の口に締め置たる若党の九郎右衛門ですから不傳は怒り心頭に發し拳を握り

歯を食しばり髪逆立でゝ憤はつたが何を云ふにも既に人質を取られて仕舞つた事では座いますから流石の不傳も親子の愛情、進み寄れば咽喉をプツリと遣られて仕舞うんだから絶体絶命の場合夫れ故如何とも詮方なく　不傳「ヤア九郎右衛門逸まるな汝主人の大恩を忘れ飽まで我を苦しむるは實に人面獣心の致し方若し聊かたりとも小万の体に疵でも付るやうな事があつては其場を去せず汝が命を取つて呉れるぞ左り乍ら若し又先非後悔いたし娘を歸すと云ふ譯なら其方の罪を責めは致さん如何に……と威しつ宥めつ胸の苦しさを悟られじとする勇士不傳も身体茲に極まりました九郎右衛門は益々圓に乗り不傳を尻目にかけ　九「楠不傳とも云はれる者が此期に及んで詐い計略も出ねいのか……エヽオイ世の中の事と云ふ者はシウ思つた通り都合よく往くものなら誰も苦勞をする者はない甘い言葉にうつかり乗り人質を取られて仕舞へば夫れ迄の事反つて此方の身体が危ねいッンな愚かな手を喰ふやうな俺様だと思ふか小万を渡すか夫れとも渡さねいか否と云へば親子の分れ應と云へば此方の幸ひサ小万を殺すも活すも只此一ッの返答次第だぞ不傳返答如何に……と突ついて居る悪い奴もあつたもんだ……小万は流るゝ涙を拭ひ乍ら　小万「イヤ喃父上斯斗りの事にて臆し玉ふな妾も武士の娘で座れば命は更々惜みません惜むは父上のお名前ばかり楠不傳は我子の愛情に惹かされ下司下郎に子を殺され阿容阿容と敵を自殺さしたと世間に評判されては我楠家の名折れで座います妾の事はお構ひなく早く敵を斬り殺してお仕舞ひ遊ばせ……サお殺し遊ばせ……エヽ卑怯でも座る父上」とイト雄々しくも云ひ放ち其儘觀念の眼を閉ぢて少しも怖ぢれも致さぬ氣な

げの振舞不傳は娘小万の親取かしき一言に勵まされたが燒野の雉子夜の鶴子程可愛い者はは座いませんので猶進み乘て居る九郎右衛門之を聞き　九「ヤア小万中々克い覺悟だ然らば不便ながら吾手にかけて俺も共々自害するッウする時は情死だ情死したと云はれりやア俺も本望……余まり此樣ことをして本望でもありますまいが當時でもナカ〳〵無理情死などと云ふ事のあるの、を聞きますと或は此時代では本望かも知れません……夫れ故九郎右衛門は右手に短刀を持かへアハヤ小万の咽喉へ突き立てんとする不傳は足摺りして今は之れ迄と思ひきや飛蒐らんとする此時早く彼時遲く後ろの垣根の間から誰とは知らずヤッと云つて突出したは、氷の如き大刀にて九郎右衛門の脊から鳩尾へ懸けてグサと突とうした夫れが爲めにアッと云つて短刀を取落し踉くところを垣根を踐み破り尙閃めかす刀の尖先に九郎右衛門か細首を丁と斬落し倒れる處を蹴飛ばし　×「由井民部之介栖正雪茲にあり先生の大敵鶴野九郎右衛門を擊取つたり……」と前へ進み沓脱ぎの石に片足を踏かけ右手に九郎右衛門の首をつき付け　正「如何に楠不傳先生今日某し初見參の引出物ぢ收め下されば之に上越す幸はぢ座らん」と差出したる件の首と不傳の面とも七分三分に見くらべて居る……大變な見方もあつたものだ……此時不傳は携へたる槍を投げ捨て正雪の前にドッカと座し恭々しく手を下げて　不傳「之は〳〵思ひ懸けなき民部殿何時の程にか身此處に潜み忍んで居玉ひしか我子の命を救ひ玉ひしは誠に此上もなき高恩不傳恭けなく存ずる」と小万と共々禮を述べますから正雪は刀を鞘に收め件の首を投げ捨てゝ歟石の上に両手を突き　正「恐々しき御言を述べ玉ふものかな某先に手水せんと厠へ參る程もなく何者にや樣側から密かに忍び込

た者がゆ座います故圖の窓から密と窺ひ見ますと曲者は奥の間指して參る樣子大方之れは物取りの類であらうと密と廊へ廻り歸る處を手取りに致さんと垣の外に身を潜ませ今や來ると待ち構へて居りますところ豈圖らんや曲者は小万殿へ横戀慕したる若党九郎右衛門とやら云ふ者で人質に取つたを善き幸ひに思ひ退引きさせぬ此場の有樣疾く此處へ飛出して刺止めんとは思ひしなれど他人の拙者が輕々しく手を下すと云ふのも余り出過ぎた事と思ひ差扣へては居ましたなれど彼れ他まで先生を苦しめ危うくも娘御を刺止めんとする有樣を見たる故斯く討ち果して座いますと言葉巧みに言ひくろめる不傳親子も最初こそ正雪を油斷の出來ぬ奴と思つて居ましたが現在目の當り大功を立てられたる正雪を何條疑ふ處がありましやう頻りに其勇氣を褒めて居る……スッカリ最う瞞着して仕舞やアがつた……夫れから

下奴に言ひ付けて九郎右衛門の亡き骸を取かたづけさせ扨正雪をば座敷へ請じ言葉を改めて不傳のアすには不民部殿先刻は某し先例なりとヤしてヨッ〳〵しく和殿の入門を拒みたれど夫れは嚴しき掟の破り難き故でゆ座る去りながら斯くまでゆ親切なる和殿の事今更ら疑う所もなしイデ改めて之から師弟の約束を結ぶことに致そう……コラ小万銚子土盃を二人の間に置く不傳は正雪を小万は式の如く恭しく銚子土盃の支度を致せ其内に從へまして床に懸けたる摩利支天の尊像を拜し鏡て盃を取換し始めて師弟の契約を取結ひました正雪は謹んで辱けなき悦びを述べ不傳も自ら欣然たる面色にて再び小万を呼び不用意の酒肴を……

小万「畏まりまして御座います……と待つ間程なく酒肴を持出し親子眞心を盡して饗應ます兎角する内に八聲の鶏も鳴き渡るに正雪も此處らで切り上げて宜からうと思つたから

盃を辭して之から暫時なりとも臥床に入と安眠ました之から
は最早内弟子に相成つたる事なれば正雪もヤメ〳〵敷働らく不
傳も圖らず正雪の爲めに一人の娘小万の一命を助けられたこと
だから大に其恩義に感じ懇ろに兵法を授け益々器量を試して見
るところが才智頴敏なる壯士故　不傳コリヤア思つたより掘出
し者だ……余まり掘出し者でもありません後には已れの身に災
害を及ぼしますを知るや知らずや不傳は深く正雪を信用いたし
自ら大名旗本の屋敷へ連れて參りましては正雪を引き合せ　不
コレは由井の正雪と申し近頃内弟子に召抱へ武藝兵法を試みま
すところ某も又及び難き處もある程世に優れたる壯士でも座る
が以後は某しの名代として折々は差遣はします何分とも傍目懇
けられて下さいますやう」と其腕前を稱し才智の程を演べ立て一
々披露を致しますので諸大名方も　大名「那の物堅い不傳がア、

云ふ位だから萬更の奴でもあるまい……と云ふんで何れも出入
を許し正雪の指南を受ける事になりましたが全く不傳の披露し
た通り武藝十八般より軍學兵法を講ずる事懸河の辯舌滔々と述
べますから後には不傳よりも評判が宜い位僅か一年斗りの間に
頓に人望を得其名海内に嘉き當時正雪を知らん者は無い位になな
つたから不傳は限りなく悦び師範の事は悉く任せ已れは年頃の
骨休めと稱へ後には全たく武道を捨たかと思ふ位心任せに月日
を送つて居りました。お咄し變つて茲に又不傳の養子和田主水に
於きましては神樂坂の別莊より日々板町の本宅に通勤いたし軍
學武藝を研究いたして居りましたが何を云ふにも近頃正雪の勢
ひ熾んになつて内外三千余人の門弟は申すに及ばず家内の男女
に至るまで皆正雪を尊敬し勢ひ養父の不傳をも凌ぐ位の程です
から自分は自然と勢力が衰へて奴僕に至るまでも碌々挨拶をし

ない程です夫れ故心に深く正雪を猜み如何にもして好き機會があつたなら之を遠ざけんといたす或日の事です急な用事が出來ましたからモー彼之れ黄昏近くでありますが主水は板町の道場へ參り別に内々の事だから案内も頼まず不傳の居間へ通り襖を開けやうとすると不圖耳に聞たるは誰やら片隅にヒソ〳〵談し聲がする尤も室内は暗く人顔も見ない程であるに灯火も点けずに談して居る主水は早くも心に頷き其儘傍へに身を潜ませ耳を澄して立聞を致しますと内には不傳の聲として　不傳如何に民部殿此程より抽者サマ〳〵と說き勸めたが兎や角と辭退いたすは家柄でも嫌つての譯か夫れとも又小万の娘となるのを嫌つての事か大方此二ッの中であらう……と少し氣色を荒立てゝ何條尊と筋目正しい彼家柄を嫌ふ抔の事を思ひましやうか夫ヤす正雪は藤き入つたる聲にて　正之は又思ひ懸けないお言葉

に又心ざまと云ひ標致と云ひ二ッ作ら備つたる小万どのを何と て某しが嫌う抔の事が彼座いましやう思ひも寄らぬ仰せこそ憚り作ら之は癖言とやらヤすこと娘を妻はせ家を讓ると云ふ思情二ッ作ら雜有い其は言葉は胆に銘じて有難う存じますが彼辞退ヤすと云ふも一ッの事情があつての事夫れは余の義にもあらず先生には主水殿と云ふ歴々としたる相續人かおあんなさるでは座いませんと況て小万殿とは幼稚ときより言號けとしてあれば何條左樣な事が致されましやう此事のみは先生の彼言葉とも思はれません左れば先日の密書を拜見して驚きましたは無據の彼乎動罪なき者を毒殺しては天津神の彼照覽罰は忽ち身に報ゆもの終には正雪は勿論楠家の芳名も之れより斷絶いたさんかと存する之れこそ誠に千慮の一失仰ぎ願はくは彼改心遊ばす樣に……」不傳は大に焦燥ち　不傳何とヤすか正雪、既に師弟の約束

いたしたとき著も悪も我が命には違はずと誓ひを立てゝ置たではないか夫れを今更ら背くと云ふのは主水を重んじて我を輕んずるからの譯であらう是れでも師弟の義と云はれる歟神に偽はり師に背く役にも立ぬ愚物を強て助けんと云ふならば今日唯今破門いたす師弟の縁も之れ限りだサア心を定めて返答いたせ……

……」と問ひ詰められたから正雪もホト〳〵持て余し困つて居るやうな有様だ暫らくして太き息をホッと吐き　正「アヽ主水殿を助けやうと思へば師の命に背くと云ふやうな譯然し主水殿も愛惜いが先生には換へ難い去らば此上は兎も角も仰せに從ひましやう」と澁々と乍ら返答をいたす不傳は大に喜び　不傳「夫れでは翌日の晩は密書の通り茶の湯に事寄せ主水を招いて首尾克く計謀を施すと云ふ事に致そう其時和殿も側に居て窃かに某しを助けて下され先づ夫迄は心に秘て必ず人に悟られぬ様用心こそ專一だ

……ナヽ用心と云へば彼の密書を和殿は何れの場所へ隠し置いたか正雪は弾々く聲を密め　正「件の密書は引裂いて捨てやうと思ひましたなれど人に見られても如何かと灰吹の竹筒へ詰め彼の丸郎右衛門を繋ぎ置きし松の木の下に埋めて置きましたから此の儀はお心安く思し召して下さいまし」と之から何やら互ひに話しを致して居るが何分にも襖越しの事とて更に聞えない聞き及んで和田主水イヤ驚いたの驚かないの　主「俺は馬鹿だ神に背き師に背きたる愚物だから毒を盛て殺して仕舞へッて……養父も養父だが正雪も正雪だ」と驚き呆れ且ッ憤うり直ちに襖を蹴開き難入らんと思ひましたけれど　主「イヤ待て今の様子では何やら密書は庭の松の根方に埋めてあるとやら幸ひ暗き木下闇心覺ねの那の松の木の下を堀つて灰吹の竹筒にある密書を得ん」と夫れから密と庭へ忍びて參り松の根を堀つて見ると案に違はず灰吹が出

ましたから土の附きたる袖に押隠し案内知つたる庭口から暗闇に紛れて通れ去つたが不傳は心底主水を嫌ひ正雪を小万の婿に致さんと思ひましたか茲には一ッの綾があつて正雪大望の緒を開くと云ふの件り次席に於て詳しく弁じる事にいたし一寸一吸いたします……

第八席

前講に於て言上いたしました不傳正雪問答の續きに移りますが此問答と云ふは實正雪が楠家を乗取らうとする一ッの計略で座います此日は楠不傳に於ては去る方より茶會の席に招かれ小万も好む道であれば同伴して屋敷を立出で暮れてより屋敷へ歸つたので主水が灰吹きを堀つて逃去つた後の事だ夫れ故決して小座敷に於て正雪と密談すべき事のある道理がない……悪む可

きは彼れ正雪で座いまして之れより先き正雪の武名海内に響き渡ると共に彌遂の山中に於て約束を結んだる熊谷坪内有竹三人の者は逸早くも尋ねて參りました座います事故三人の者には夫れ〳〵澤山の金を取らせ密かに已れの大望を粗略し咄し之より市ケ谷あたりの下宿屋へ忍ばせて置き先づ第一番に有竹作右衛門に牒し合せて主水より小万に宛た書置きと又不傳から正雪へ送る密書とを偽筆させ左司馬を呼下奴姿にてしらへて俺れの草履取りとなし充分用意も整ひたる事故偖能き折もがなと窺ふところへ此日丁度不傳は娘の小万を伴れ或る屋敷へ立出でたものだから此時を外さず幸ひ主水も來たと云ふものですから左司馬を暗く一室に招き寄せ鶏鴨返しの名人ですから之を以つて悉皆不傳の聲色を遣はせ態と密書の所在までも示して主水を罠に懸け夫から不傳の歸りを待受けて

此度は偽筆の書面を拾はせると云ふやうな譯……然るところ開な巧みのあらうとは知らぬ不傳は屋敷より立歸り獨り我居間に入らんとするト見ると廊下の片隅に手紙やうなものが落ちて居る　不傳ハ何だか知らん手紙らしいが……とソコは娘を持つて居る不傳の事夥多の門弟中に一人の娘を置く事故又ドンナ悪出が付かんとも限らない夫やこれを心配いたして居りますので すから拾ひ上げて見る然るに其表書を見ますと書置の事と書てあるは紛ふ方なき主水の筆にて娘小万に宛たる手紙だ不傳は眉を顰め暫らく頭を傾けて居たが物に驚かぬ勇士の事とて打騒ぐ氣色もなく鳴居に懸けた額の後ろへ隠して置きサあらぬ体にて居る其内に追々と夜も更けて參りました召使ひの者も夫れ〳〵寂靜つた頃になつたのでソッと件の書狀を取出し灯を寄せ讀下すとイト荒々しく認めたる筆勢自然と怒氣を含んで

父上には此程より深く正雪を愛させ給ひしあまり汝を妻にめあはせんとて種々心を碎き居りしなれど我と云ふ者あるを以つて未だに其事を果しはぬは竊かに我を毒殺して其障りを除かんと仕たもう最恐ろしき心を起され折を伺ひ給ひしも尤も竊かに我を憐みて確と告ぐる者も有之愕きたれど詮術を知らず斯れば父は名のみにて實に虎狼よりも恐ろしき仇に座し因つて我先づ父君を弑して其恨みを報せんと存じ汝は言號けの縁しも深き筒井づゝ振分髪のむかしより實に敗妙の妹と脅の中にしあれば打明けゆしなり我も父君を弑しては其罪いかで脱る可き縛を首を刎られんより其場を去らず自殺を遂げゝへば之れ今生の別にゆ座し遇ふて心の程を告げんと存じへ共事急にして明日の夜に差迫れり因て摘み斯は書殺し次第に付推もし願上し也

と云ふ最も忌々しき文面不傳は之を見て呆れて仕舞つた……其筈です自分はソンな事は更らに知らんのですから夫れを突然に主人がコンな事を小万の處へ言つて越すやうじやア何かソコに事情がある事だらうと茫然として暫らく考へて居たが忽ちハタと小膝をうち　不傳「ウハヽヽヽ大方之は正雪を猜む者があつて打つけにも書れない書けば却つて疑を延き起すだらうと云ふ事を恐れ夫れで態と主水の事のやうにして偽筆の文を認め他に拾はやうと思ひ夫れで室の前へ落して置き最初此方の了見を動かして正雪を逐しめんとする計略だろう……夫れに能く〳〵見ると巧みには書てはあるが如何にも拙きところが見ゑる偽筆だ……偽筆に違ひない……淺渉な奴もあつたものだヨヽ〳〵此奴計

略の裏を欠て主水を明日の晩召で見やう樣子を見りやア大概分るものだソウして虚か實か夫れさへ明かになれば又施すべき術もある」と其晩は其儘床に就き件の文の事をば深く胸中に隱して置く此方は又和田主水堀り出したる密書をば袖に隱し宙を飛んで歸つて參り戸締をも確くなし鏡て密書を取出し開いて見ると紛れもなき養父不傳の筆の跡シカモ正雪に送つたもので紙も甚く採て居るが文面にはアリ〳〵と豫て諜し合はせたる通り明日の晩は茶湯にかこつけ我を招き寄せて經應ふりに見せ懸け竊かに茶の中へ毒を入れ亡き者になさんと云ふ其手配を記し・て浮座いますす主水は此密書をば披見に及び　主「チエー殘念なるかな無念なるかな如何に正雪の腕前優れたるにもせよ我を亡き者にして小万に娶せんとは卑劣極まる楠不傳……父とは思はぬ師と思はぬモー此上は之れ迄だ」と件の密書をばズタ〳〵に引き裂

き憤怒の形相すさまじきばかり

主「ア、但は云へ今宵幸ひに行き合せずは明日は必ず命を亡き者に致す處であつたらうがマア

〜僥倖の幸ひだ危なかつた〜……クレども斯うなつては何日か一度は彼れの刀に命を落さなければなるまい夫れも馬鹿々々しい事、先きんずる時は人を制し後るゝ時は人に制れらる折があつたら躍果して呉れん」と胸に問ひ胸に答へ其晩は兎斯う思案に暮れ臥戸へ這入るケレども殺されるか生るかと云ふ生死の境であります事なればマンジリとも眠る事は出來ない其内に夜が明けた扨翌る日になりますと不傳は主水の胸を試し其上にて計略の裏を缺て遣らうと心利たる若者を遣はし密々に言ひ含める、使の者は主水の處へ參りまして

使者「エ、若旦那さまへ……大先生のヤしますにはモー冬になつて追々日も短かくなるから日々通勤しても只顔を見る斗り、碌々咄しも出來ないでッィ〜

疎々しくなる斗りだ幸ひ今夜は茶を點て小万正雪等と共々世の中の冗口でも咄し日頃の鬱を晴したいと思ふから何事を置ても今夜は來て呉れろ……と云ふ口上で座いました是非待ッそうですから出でなすつて下さいまし」と云つて使の者は立歸る、その事を聞き及んだる主水に於ては　主「扨こそ愈々不傳の狙ひ見も相分つたヨシ〜其義ならばと改めて此方より使の者を遣り大略の事を書面に認めて遣つた

先刻は沙招に預り折角の思召し難有存じへ共拙者事昨夜より寒疾に擾り風に當りし時は發熱甚しく心地惡しくしまゝ折角の思召なれども厚命に戻りし誠に本意なき限りなれど惡しからず沙推察下され度し以上

月　日

尊父様

主水

不傳は此狀を見まして眉根を顰め　不傳「之は大方虛病だらうヨ〜此分なら拙者自身に往て見て參らう」と斯う思つたにより早速使の者に自身見舞に參ると云ふ返辭を遣りました斯の如く彼是れ往來して居ります其内に日は暮れて仕舞ふ不傳は鴛籠を申付け神樂坂の別莊へと參る途中四ッ小路なる地藏坂へと差懸りますす折しも傍に茂れる藪影より誰とは知らず槍ひき扼き不傳の鴛籠の後より　×「エイッ……と云ふ矢聲と共に鴛籠を目懸けでグザッと突いた流石の楠不傳先生なれど闇夜の礫には避け難しと不意を喰つては堪らない右手の胸より乳の下深く縫はれて　不「アッ……と云ひ倒れんとする左れども氣丈なる不傳の事故負傷を確と押へ逆しる血沙をば片袖にて抑へ鴛籠の戸を蹴破つて躍り出で　不「ヤア何者なれば聲をも懸けず暗打に致す卑怯千萬名乘れ〜……と息も忙しく詰寄せる、大身の槍を小脇に搔込みた

る和田主水怒れる聲を振り絞り　主水「ヤア老耄れめ事の起因は其方疾に承知ならん此期に及んで何をヤす覺悟いたせ」と呼はり乍ら復突き出す槍先を手負ひ乍らに扳合せたる不傳は丁と受止め　不「ッッ云ふ聲は主水なるか仮令如何ばかり忍び難き事があると雖も親を弑する人面獸心觀念いたせ……と負傷に屈せぬ勇士の切先き丁々發矢と切結ぶ去れども最切の手傷にヤ、ともする太刀先き乱れ足もシドロに相成る處を生憎にも石に躓き其場に搖と倒れました得たりと主水は跳り懸つて終に絶命を刺す此時後ろの方よりして鞠水の定紋打つたる弓張の提灯高くふり照し走り來れる武士あり主水は今更ら驚き騒ぎ走り去らんとする件の武士は衝と行先に立塞り天地に響く大音聲　武士「ヤア曲者逃るな其處動くな由井民部之介此處にあり我師の仇敵ヤワカ脱さん首差しのべて刀を受けよ」と罵りながら右手に持つたる提灯

をパッと投付け太刀眞額に拔翳し擊て撼る和田主水はハヤ之れ迄と思ひけん心得たりと槍を扼き丁々發矢と戰ふけれど迚も正雪には叶ひません未だ十合と打合はせないのに槍をガラリと卷き落され遽てゝ刀を拔かんとする其隙を見て正雪はヤッと叫び切り込んだる一刀は肩先より乳の下へ撼け二三寸斬り込んだから堪りません忽ち撞と倒れたから正雪はスカさず首を打落したる折しもあれ不傳の門人十名斗り撼け附けたが何を云ふにも此仕末だから只モー驚く外はなく正雪の功を賞し不傳の死を悲しみ只茫然たる斗りで座います去れどもイッ迄斯てあるべき事ならねば戸板へ乘せて其儘亡き骸を道場へ昇ぎ込む小万を始め門弟衆の驚き大方ならず其内に和田將監松宮藤左衛門楠正右衛門何れも一門の事ですから早馬で飛ばして來たがモー事の切れたる跡であるから檢視を願ひまして野邊の送りを出しまし

たが扨困るのは跡々の相續人で座います何を云ふには和田主水は楠家の養子です小万とは言號の仲です其主水が養父を殺害したんですから誠に親類の者も途方に暮れて居ると云つて之れ迄盛つたる道場を此儘に潰す譯にも往かず小万にも心の中を聞いて見ると仇し男を持つのは厭だモー主水さんに分れては二度と夫は持ちませんと斷然言はれて仕舞つたからは親族の方も仕方がない此時楠正右衛門の發言で　正「何時まで斯うして居たところで小田原評議何にもならんから寧そ斯うしたら如何でしやう門弟中で腕前の優れたる者を養子に致し楠家の名籍を續がして言はゝ夫婦養子と云ふやうな譯だ左樣でも仕なければ別に法の立て方もあるまいて……」と口を切りました一同も考へたが別に名案のないところだから、〇「其儀は尤もだ　×「之れが宜ら

〇「至極尤も……」と云ふ譯で夫れから門弟一同にも此旨を

を申聞け茲で軍學問答となつた併し何百人門弟達が居たとゐるで當時評判の高い由井正雪、楠不傳云ふ位の人だから一人として及ぶものはないソコで楠家の相續人は由井民部之介に致すと云ふ事親類一同の承諾がありました……旨くやつたのは正雪で和田主水の自滅するのも楠不傳の命を縮めたのも何れも己れが胸中の計略で楠家の系圖を得たい一心此れさへ手に入れゝば乃ち大望成就の緒である……と云ふ時の至るを待つて居たが此度は愈々時節が參つたものか望み通り俺れの惡計なりと人にも氣の付かれない樣にツマ〳〵と系圖を手に入れ楠家の嗣子と相成りました小万は浮世の有樣をツク〳〵と思へば思ふ程あじきなくなり終に鎌倉山の松葉ヶ谷へ參り尼寺へ這入つて尼となつて仕舞つた斯うなると最う正雪は一人も邪魔者が居ないサア愈々日頃の大望を企てんもの

と之よりは束の間も油斷致さず先代不傳の身に着たる衣服大小より諸道具に至るまで品のよき物は悉く取出し一門の人々は云ふも更なり重立つたる門弟誰彼れの區別なく殘る方なく分て遣り少しも名ゐむ樣子も見ないない夫れ故一同の者も金々感服に及び敬ひ尊ばざる者はない位ひ扱ひ其年も暮れ明れば寛永十年の正月元日を以つて正雪は名弘めの祝ひを兼ね親類并びに高弟等を招き寄せ床の正面には楠正成左手に正行右手には正儀と三幅對の畫像を懸け小櫻縅の具足に三日月樣の鍬形へ白銀を持つて菊水の定紋打つたる兜を備へ韓紅の濃房つきたる金の軍扇銀の采配を握り太なる重藤の弓に鹿の羽はきたる二十四の征箭をうつぼの儀に飾り立てたる其正面には高蒔繪なせし見台の上に彼の六韜三略の軸を載せ民部之介正雪は見台に打むかひたる事にて兵書を三行半ばかり講釋をなし頓て扇子を杓にとり同しづかに陳る

やう

正「夫れ越鳥は南枝に巣造り寒馬は北風に嘶くと聞けり禽獸すでに其源を忘れず況んや人に於てをやッ〳〵我邦の兵法を見るに元之れ六韜三略に法どるものなれば實に其源は韜略なり我邦にては義家正成異邦にては張良孔明何れも甲乙なきぞと去り乍ら某より其事跡を見る時は張良は尚義家に優り正成未だ孔明に及び難し因て某し今日より張良孔明が智勇を思ひて張孔堂とぞ申し侍らん各々其意を得られよ」と滿座を眄と見渡した る威風凜々實に三軍の將として恥かしからぬ程である夫れゆゑ幷び居たる面々も唯お目出度う惣座いたすと祝して居るばかり正雪も大に喜び十二分に用意したる山海の珍味をば處狹しとまで陳列連ね夥多の女共を侍らせ正雪先づ盞を取つて夫れからお定りの盞を巡らし上下打寛いで酒を飲み皆十二分の醉を發し亥の刻過ぎる頃一同の者夫れ〳〵引き取りました翌日になると正

雪は大きな額を拵らへさせ

軍學兵法十能六藝之師範

と云ふ十一文字を筆太に記し夫れをば玄關に高く揭げ益々門弟達をも深切に指南する夫れ故深切を喜ぶは人情の常門人彌々敬服いたす其勢の廣大なる事と云つたら恰然旭日の昇るが如く海内無双の兵法家は由井正雪だと云はれる程の人望に相成つたから誂れも一能一藝ある者は正雪の門を訪ねぬものはない夫故浪人共は其寛厚なる正雪の言葉には誰れ一人なつかないものはないより正雪勇士を聚め遂に大望を起すと云ふ茲に丸橋忠彌と云ふ大豪傑があつて密に其計事を扶けたが其人の口よりして返つて密謀の顯はれると云ふ住境に入るの件り次席のお樂しみに致します……

第十席

去る程に其年も何時が過き寛永十一年となつた或日の夕方正雪は未だ散り殘る櫻生の花の夜景を詠めんものと獨り板木坂の屋敷を立出で小石川より下谷を過ぎ待乳の山を越へ牛嶋の方へ淡らんとすると見れば河邊に一艘の般は繋いでありますけれど如何せん肝心の渡し守が居ない正之は困つたな矢張に船へ乘つて往く譯には往かず……と暫らく河原に佇み両人遲しと待て居る處へ最汚ない乞食体の者が橋場の方から參り同しく正雪の傍へ參り舟待ち顔に佇んで居るものですから何心なく乞食の有樣を見たる處振り乱たる髮は芒の如く搖垂れた裝は恰で荒目のやうだ穢ない事樣ない事側へ寄られては鼻持ちがならん位で傍座います併し正雪と云ふ人は人相を觀ること

が上手な上に何か宜い人物があつたら抱へたいと云ふ折から故ヒョッと其骨柄を見たる處年の頃は二十三四身の丈高く逞ましく尋常の物貰ひではば座いません一癖ある奴と白眼らんだから何の位の腕のある奴か試して遣らうと思ひ正「コラ乞食ソウ問近く寄ては臭氣が甚しく堪られんわ退れ〳〵……」乞食は小言を喰つたからハッタと怒つた乞食「ヤア奇怪至極なる三品め撫雀何ぞ大鵬の志を知らんや汝両刀を手ばさみたりとて野田の案山子の弓筈に均しきやラ〳〵刀ンンな物が恐ろしくて乞食が出來るか我が身体が臭いと云つたつて俺の勝手だ臭くて悪ければ三品奴其方退り居らう……と一本遣り返しました不敵の宏言正雪は彌々床しく思つたが、もつと試して遣らうと思つて居る……余り人が悪いや……ケレども茲ぞと思つて正「ヤア言はせて置ば雑言過言武士に對して無禮なり今一言返して見ろ手は見せん

ど」と鯉口寛ろげ勢ひ鋭ぎく敎圍き撼る侮り難き身搏へに乞食も
スカさず飛しさり忽ち川端へ走り出で彼の渡舟を繫ぎ留めたる
一丈余りの水棹を拔とり右手の小脇に搔込み左手に正雪を差し
招き乞食「如何に三品勇あらば我船棹の槍の手を試みよ……と
言はせも敢ず棹を捻つて突き撼る」仕濟したと正雪は打喜こび
刀を拔かず腰の扇を拔き取つて飛鳥の如く身を働かせ雄雌を爭
ふ奮擊突戰一來一往上段下段兩雄士は少しも疲ます半時あまり
も鬪つて居る豈圖らんや此乞食ころ寶藏院の管槍秘術に通して
居る稀世の英雄寶に珍らしき手練だ正雪も呆れて仕舞ひました
幾ら手元へつけ入らうとしても突出す槍先きは電光石火終に隙
を見出す事が出來ない……乞食の方でも正雪の手並を見て出汝
自在左かと思へば右へ交し世にも珍らしき早業を見て心中大に
愕ろいて居る斯る處へ熊笹の茂みを押分け現はれ出でたる二人

の虛無僧左右に分れて双方の呼吸を揣り等して後ろより確と抱
き止め　×「如何に正雪殿金井民五郎にてしい　△「加藤市右衛門に
しい　双方先しばらく鬪ひを止め給ひ……」ハヽ〳〵と押止めた
る故正雪は抱かれ乍ら一足跡へ飛しさり両人を佶と見ますと成
程金井民五郎加藤市右衛門の両人で沙座いますを之を聞いたる乞
食も叱驚した扨は噂に高き正雪と云ふのは此人かい道理で強い
と思つたと暫らく惚れて居る此時正雪も金井加藤の両雄士に向
ひ一別以來の挨拶も濟みましたから乞食も船棹をガラリと投げ
捨て恭々しく正雪の前へ頭を下げ　乞食「某事は出羽國の住人今
は故あつて母方の姓を名乘る丸橋忠彌とヤすもの扨も先生が沙
高名は既に承知いたしましたが正雪殿とは心注かず某し眼あつ
ても眼無きと全然無禮の段は平にご高免を願はしく存ずる」と禮
義正しく述べますスルと金井民五郎ケヤンな顏をして乞食を見

て居る　民「扨は先年出羽地方を巡歴のせつ武藝の試合をいたした丸橋殿ではゆ座らぬか　乞食「如何にも金井殿其節試合を願つたる丸橋忠彌殊にゆ引合せにて由井正雪殿の邸へ推参いたすゆ約束故出府しては参つたものゝ浅しや路用に乏しく此通り乞食の態に相成り實は只今名乘り申すも恥かしき至り……

民「イヤ何しても不思議の對面……と正雪に引き合せる正雪も恭々しく挨拶に及び　正「サア丸橋氏夫れでは却つて禮に過ぎたる致し方先づ立ち給へと禮を返し　正「何は兎もあれ茲の河原では咄しも致されん屋敷へ参つて緩々ゆ挨拶も致さう」と之より手づから他れの下衣を脱ぎ　正「忠彌殿失禮ではゆ座れど先刻よりの有様兎角く身の衣を見る世の中なれば煩さくはゆ座らうけれど着替へ玉へと笑ひ乍ら出す……何も笑つたからと云つたつて馬鹿に致して笑つたんではない……件の衣を押戴いたる忠彌は手早く着換へたる事にて金井加藤諸共に先きに立つたる正雪の後に付き板木坂の屋敷を指して行く夫れから主客の座も定まりましたる事故正雪は酒肴を命じ只管に饗應ます此時民五郎は膝を進め　民「某事は彼の大聖寺の山中にてゆ別れ申してより倘諸國を經廻る内追々ゆ尊名も廣がり知られ出羽にて丸橋氏に出逢つた節も民部殿の事をシカ〳〵之々と物語りたるに丸橋氏は仔細あつて是非對面いたしたい見參の上に力を借りたい事があるから と云ふ譯で實はゆ引き合せ申す約束をいたしゆ別れ申したが昨夜千住の宿に泊りたる折合宿になつたのが加藤氏色々身の上咄しを致して見ると之から板木坂の由井正雪を尋ねる者で既に正雪殿武術修行中のゆ約束もあるとの事之れ幸ひと思つて互に名乘り合ひ打連れ立つて隅田川を参る途中今日の出來事爭そう一人は丸橋氏とは知るや知らずや民部殿には互に武藝を試みられる

不思議の對面奇遇と申す外は御座るまい」と互みがはりに之れ迄の事を物語る迫々く夜も更て參りましたがナカ〳〵酒宴の已む樣子もなく盛んに談し聲は致し居る此時正雪は丸橘氏に向ひ「正金井氏の御咄し中貴殿が某しへ頼むの一義とは如何なる事で御座るか苦しからずは御咄し下さび不肖なりと雖も御頼みの一義不道理なれば命に替へても諫め申そう又當然の事では座れば盟つて力を合せましやう」如何に如何にと云ひ乍ら傍の脇差しを左手に取り右手に小柄を抜とりて丁々と金打に及ぶ金井加藤の兩雄士に於ても共に形を改め兩人某等兩人は夙に正雪殿とは盟を結んで弟となり兄となる異体なれども一心全体貴殿を扶けて義の爲めに死ぬのは元より願ふところ少しも心に懸けられず仰せ下さい」と各々脇差を引きつけ金打をいたしました忠彌も彼の三雄士が金打をして盟を立てたる有樣を見て心を鎮め三人

の顔をツク〳〵と眺め暫らくあつて四方を見廻し信と正雪に目配せに及ぶ正雪は早くも心を悟り忽ち手を拍ち近侍の者を呼び何やらん囁やくと委細承知と四方の襖を外しスッカリ四方が見透しになつて居る先づ之れが密談の法で御座いましやう四邊の人をば拂つた事にてありければ忠彌は嚴然と容姿を改め辭を密めて三人に向ひ「三人の豪傑茲に在るに某なんで詐りを申述んイデ胸中をお咄しやう元某の父は土佐の國守世に聲いたる長曾我部宮内少輔盛親で御座るが父盛親は先年石田三成に與し旗を江州に翻へしたなれど兩將共に武運拙なく石田三成は誅せられ盛親は大坂の乱に兄四方太郎と諸共に伏兵の爲めに取圍まれ墓なく伏見の露と消へ夫れが爲め某の母は某しを抱き千辛万苦して古郷出羽の最上に祖父丸橘曲流と云ふ者がある其處へ身を寄せ昨日に變る洗濯針仕事僅かな賃錢を取つて某しを育

て學げ漸く十五才と相成つたる時元服を仕たとは云ふものゝ世を憚れば本姓の長曾我部は名乘らず母方の姓丸橋に改たゆ忠彌盛澄と名乘る其内に祖父は身まかり母も夫れから三年目に病氣に罹り終に歸らぬ旅路に赴かれたから益々困難いたす許り去れども母の遺言もゐ座います事故武藝を修め人並と相成り他日は父の志を襲で及ばず乍ら時の天下を恨みやうとの考へ之より去る武藝師の許に養はれ火焚き水汲みの片手間に必死となつて槍術を學び免許皆傳も得たる次第先年金井氏出羽を遊歷の節貴殿の樣子を伺ひ志を打明け力を藉んと思ふ然るに今日の對面之れ本望を達するの緒にもやあらんか思へば今更ら胸も裂る思ひ……と慨然として本丸の方を睨む心中を察したる正雪に於ては之れ屈竟の味方を得たりと大に悅び一層聲を潛め

正丸「ナニ承知下さつて

正雪「如何にも承知いたした……と斗りでは分かずに相成るまいが……と四邊を身廻し何も隈なく承知いたした譯では無く茲に座る加藤市右衛門殿之も仝じく貴殿と相當る恨みを懷いて居ると云ふは酒井讃岐守を仇となし永の年月附け狙ふて居る仔細は之々云々……と前席に述べたる芝三綱山增上寺の一件を詳しく物語り夫れと今此席に連なる和殿第三人を除くの外に何大望のある者あれど未だ時節と味方を得ず質に本意ないと云ふは此事ばかりに頻りに嘆息いたして居る此有樣を見たる三人の者は何々眉を顰めて正雪の面を見詰めて居る忠彌は逸く也小膝を進め

忠「ハヽア貴殿にも何か企て給ふ事ありとや既に某しとても貴殿を賴み最云ひ難き意中をも明したるやうな譯、去れば今より義を結んで生死を共に致さんと存ずるに隔て心のあつて大望を明し賜はぬ貴殿の心こそ解かしき限り……と云ふと

金井加藤の両人も同じく小膝を進め　両人「斯までも両人の者共義を結んである上は假令生れる時は異なるとも死ぬのは共にと盟ひたるに心を明し玉はぬては奈何にも不本意千萬な譯夫れ共吾々両人をば頼むに足らぬと思召されたるのか如何に〳〵……二人等しく詰め寄せる此時正雪は端然として彼の三人の面を見護り　正「斯く迄谷殿等が誠心を以つて拙者を扶けんと仕玉ふと添じけなき至りで侈座る去りながら此處では侈咄しす事も出來ぬイザ此方へ……と座を下り遥か離れたる茶室の内へ案内いたし侍女を呼んで灯を点させ　正「俺は此處で三人の侈相手をいたす夜中の茶會だそれ故閑靜が第一用があれば呼ぶからして此處には撫はず彼方へ往て休息が宜い　女中「ハイ有難う存じます左様なればお客様方……三人「侈苦勞で侈座る……之から女中達は本宅の方へ往て仕舞ふ正雪は戸の内から兼てより備付

けたる茶碗を取出し嚙て左の二の腕を刺しサッと迸る血沙をば茶碗の中へ絞り込み三人の前へ出すと三人も之に倣ひ雄血を絞つて正雪の前へ置く之から正雪は先づ天地四方を拜し　正「今此四人姓氏異なりと雖も今日義を結んで兄弟となり艱難死を以つて相救はん假令同年同日に生れざるも願はくば同年同日に死んも若し聊も此盟に背かば天雷立どころに我々を離ん今各々誠心を盡すに其誠血を以てす爰に恭々しく上天に告ぐ急々如律令」と稱へ四人の者も齊しく天に向ひて九拜なし誓を立て正雪先づ血を入れたる器を取揚げ一口啜り夫れから順廻しに呑み廻す……妙な茶の湯があるもんだと思召す方も侈座いましやうが之ちやア茶の湯じやアありません侈案内の通り之れが血を啜つて誓を立てると云ふ武家の作法で侈座いますケレども茶碗で呑み廻して居るから人か見たところで血を啜りあつてるとは思はない茶室

に於ての飲廻しだから之れは茶臺にあることと疑がはしく思ひませんと云ふのはナカ〳〵選んだ仕事で此座います此時正雪は答姿を改ため　正丸橋殿の斯く義を結び兄弟の誓を立てた上は何をかお隠しヤさん熟々古今の英雄を見るに元より王侯將相とて種のある譯にあらず只巧みに干戈を動かし強よく弱を侮り呑し志を果したからの事彼れ秀吉は布衣より起つて終に關白とまで經り昇たる實に位は人臣の極となり高名後世に遺る之の上もなき究き例だ然ば關白となり將軍となるも唯其智と勇とのあるばかり人間一生の間豈碌々として暮さん夫れ故一度は事を起し中原に鹿を爭はん事既に其策略定まつたり和殿等幸ひに某しを助け手に唾して蜂水の旗を飜へさば六十余州を分割なし東西南北に覇府を開き名を萬世に傳へん事は掌を反すよりも易きことと左すれば丸橋が志をも貫ぬき加藤は酒井を擒に致し存分に仇を取る

事思ひの儘でゆ座らう各々も胸を定めて返答下さいと始めて明す大望の一件熟々聞き及んだる三人の勇士は茲に如何なる返答に及ぶやは後席に讓つて辨じます

第十一席

ヱヽ聞き及んだる三人の勇士は引續き言上を致します……ヱヽ慨然として正雪の胸中に感激し共に小膝を進め　三人云ふにや及ぶ正雪殿女は己れを悅ぶ者の爲めに裝ひ士は己れを知る者の爲めに死す不肖乍ら吾々三人人がましく思召され斯る大事を打明かされし上に於ては今年今月今日正に承知いたした如何にも共に死にましやう……と云ふ事になつたから正雪も大に悅び聽て連判狀を取出して各々自ら筆を執り姓名を書き記し血判に及び　扨然らば之より力を協せ以來各々心を盡し之をと思ふ者

があつたなら說き勸めて徒黨に引き入れ其時々記名血判いたせ何か天下に異變あつたならば其機を圖り事を擧げるやうなに致さん　正如何にも其手配りは事に臨み正雪宜しく來配を致さんと之から種々の事を密議に及んで猶色々と打合をいたしたか何を云ふにも一人や二人でする事ではムいません數多の同志を募らなくては相成らん事ですから夫れより彼の股肱の臣と頼みたる有竹作左衛門に云ひ付けて偽筆で以つて尤も巧みに認めさせ紀伊大納言は謀叛の心あつて密かに正雪をお頼みになり諸國の浪士をかり集め先觀端を開けと云ふ虎の丸に頼の字ある朱印を謀判なし頼み狀だと云ふ者を拵へさせて置いたと云ふのは幾ら楠家の名望でも當時には矢張り當代の名望家が頭に立たなければ仕樣がありません夫れ故正雪は何處から紀伊大納言の偽筆跡を引張り出して來たのがトウ〳〵謀書謀判を拵

らへました一說には正雪が未だ諸國武者修行の最中に紀州和歌山へ立寄り武藝を以つて取立てし貴はうとした其時に紀州家の老臣三浦長門守と云つて此方は軍學兵法の名人ですが此三浦長門守と云ふ者に正雪の胸中を見破られ若干の金子を頂いて立去つた其時に何かして頼宣卿の偽直筆物を取て置たと云ふ事ですが夫れは恐らくは曖昧なもので兎も角も偽書謀判に巧みなものが居るんだから何分か惡い事をする奴は其心得のあるもの夫れ故夫れ等の手で悉皆出來上つたものでは座いましやう……夫れにモー一ツ人心を收攬するに克い計略があつた夫れは何だと云ふと楠家正統の系圖之れは中々太したもので楠家と云へば先づ兵法軍學に悉け軍の悉引と來たら日本一だと云はれた位の人だ其正成の流れを汲でる正雪だから家柄ではあるし軍學にも達して居ると云ふ自然の信用を置かせますナニシロ此時分と云物は

系圖を頂んだもので今のやうに氏もなく系圖も低い者でも氣量しだい智謀次第で如何樣にも出立の出來ると云ふ時代とは全で違つて居りましたから正雪の此邊に苦心いたしたは尤もな譯だ夫れ故正雪こそは楠家の末裔に紛れなしと彌々尊敬せられて參るやうに相成つた。之れで一先づ正雪は俺れの大望を明し是非の力になつてやらうと云ふ味方も出來ました事ですから此上は時節を待つ迄忠彌にも相應の事をさせて遣りたいと云ふ考へを持て居た幸ひ此頃大岡源左衛門と云ふ旗本の持分になつて居た本郷お弓町に在る下屋敷を五千兩で手拍になり悉皆茲へ普請をいたし造作をも美を盡して奇麗に拵へ仝じ町内に住で居る弓師の藤四郎と云ふものがある其娘に乙輪さんと云つて頗る別品……此乙輪さんをば忠彌に世話をし女房に持たせました……之は如何云ふ譯だと云ふと何も此忠彌と云ふ人は武藏の出來ます剣

合に氣が短かい何でも此短氣な人を直すには女房を持たせると云ひと云ふ事……妙なもので女房を持つと剛氣な人も自然と氣が折れる樣な譯のもの結局心が素直になるんでいもありましやうし併し之れは萬人が萬人皆な左樣と云ふ譯には往ない女房がはづれりやア夫れ迄の事だから……ケレども正雪は萬事に抜目のない人物故イッカ藤四郎の娘乙輪の溫順なる誠に人柄だと云ふ事を見込んであつた夫れ故那れならば忠彌に嫁したところで屹度忠彌の心も直になり又自然と荒々しいところも直るだらうと云ふ考へで世話をいたす事になりました、デ玄關には

寶藏院管槍之指南

と云ふ八文字を筆太に記してあつた看板を出したルト流石は江戸の事だから忽ちパッと評判に立つて甲「如何だい板木坂にや正雪と云ふ大先生があつて十能六藝何でも知らない事はな

いと云ふ大層な看板を出して人を驚かせやがつたが那りやア實に腕前が出來るから確かなもんだ　乙「ウー成程……　甲「ケレども那の看板の子分位な天狗を吹きたてた看板が出たせゝれ迄聞いた事もねい丸橋とか云ふ名前だ　乙「ソイッは聞いた事がいな一体何を敎へるんだい……マア左樣ブン〳〵怒らねいで氣を落付けて咄しなせいな　甲「夫れでも余まり人を馬鹿にして居る……　乙「ぢやア何だな今日往來に於て貴樣が其武藝者に恥でも與へられたと云ふんだな　甲「ナーニ斯んな事は俺ア知らねいよ　乙「夫とやアマア如何したんだい怒るにやア當らねいとやアねいか　甲「デモ癪に障る　乙「何が……　甲「看板が……　乙「詰らねい者が癪に障つたもんだなア……斯う云ふ塩梅に寄ると障ると丸橋忠彌の悪大總な看板に目を付け誰しも驚いて居る其内には忌々しい奴だ一番往て突伏せて見れやうなんぞと思はないものも

ない事はない血氣に逸早る連中は先を爭つて試合を致して見るけれども何が扨正雪でさへ容易に勝つ事の出來なかつた忠彌の腕前ですから向ふへ廻るものは一人も無い……スルと又此評判がパッと立つた　×「何でも江戸は廣しといへども日本は宏大なりと云へども當時槍を取つて天下の名人と云はれるのは本郷弓町に道場を構へたる丸橋忠彌先生の上を越す者はない」と云はれる位になつた夫れだもんですから指南を受ける者は益々多く忽ち門弟四五百人に相成り一方ならず道場も繁昌いたします其合間々々には正雪も忠彌も盡の疲れを慰むる爲め茶會を催し骨休めをすると云ひ觸しては正雪の庭中に構へたる茶亭へ集り金井加藤を始めとし一味の重立つたものは何れも會合いたし夜々軍議を凝して居る併し此席へは決して仝志の外誰れ一人として入れる事を禁じ用心もおさ〳〵嚴重で座います斯の如くして四五年

經過ます内に四人の者は相談一決の上金井加藤の両人に夥多の路用を與へ先づ駿州より京大坂四國九州の果までも廻らせ密かに紀州侯の内命だと云ふ謀判のすはつた浮説書を振り廻して到る處に浪士の者を説き勸め後年事の起りしせつは江戸京大坂駿府と思ひ〳〵に走せ集る可し各々軍功によつては夫れ〳〵の恩賞ある旨を傳へさせた両人の者は畏つて翌日直に出立と云ふ事になりました正雪は二人の者を送つて高輪の大木戸迄參り之から袂を分つて獨り板木坂へ歸る折しも芝増上寺のはとりにて頻りに鐘木半鐘の音が聞えます

×「ソラ火事だ〳〵……」

ワーツワ……と云ふんで昔しから火事は江戸の花と云はれた位ですから彌次馬連が駈け出す……

ト見ると黒烟りは天に登り見る〳〵八方へ擴がる有樣なり夫れなだれを打つて此方へと來懸る

正「ハテ此邊まで騷ぐと云ふのは不思議な譯だ何したんだらう……」と思つて暫らく往來を見て居ると騷ぐのも無理はない大きな車を曳いて居る牛が出火の騷ぎに驚いて二十俵余りも積んであつた米を殘らず振落し身輕くなつた儘いよ〳〵烈しく家であらうが人であらうが角へ引掛けては振倒し疾風の如く蒐けて來るとやすと何だか仰山な事を伺うやうですが那なノロ〳〵しがとなつて怒つたら堪らない駈あらをしたら馬よりも返つて早い位だ其勢ひで角を振廻しウヮー〳〵……と哮り乍ら來るんだから誰一人之れを止やうと云ふ者はないスルと數多の群集を押分けて立出でたる一人の大和尙

×「退いた〳〵……」と云ひ乍ら

次の両袖を捲り上げ暴れ來る牛を物ともせず大手を擴げて駈け向ひ暴れ牛の左右の角を楚かり仰へ押れつ押しつ暫らくは揉合つて居るが牛の事に惣身の力を籠め矢聲烈しくエイッ……と

由井丸橋之傳

云ひ樣大八車と一緒に地響きをさせましてからにドッと捻倒して仕舞ひましたは實に珍らしき怪力の坊主だ　甲「ヤア豪いな坊主……豪ぞ和尚　乙「チイ〳〵お前さん賞るのは宜いけれど坊主だの和尚だのつて云つちやア宜くねいせ坊主さんだとか和尚さんだとか斯う丁寧に言つたらも爾うだケレども頭を薙髮つて居りやア坊主にやャ違ひなから　乙「厭な事を云ふなア俺アお前さんに何も喧嘩を賣つたんじやアないよ　甲「ソンなら默つて居やがれ樂鐺奴……其内に牛飼もイヤセキ走て參り只管和尚に喜こびを述べて落た米をば積込んで品川の方へ牽いて行く其内に火事も鎭まつたと見ねまして半鐘盤木の音も止だ件の和尚は緩々と塵打拂ひ元來た道へ引返さんとする群集に押されて往く事も出來ず歸る事も出來ず往來に佇むんで居つた正雪は今此和尚の怪

力を觀て　正「イヤ强い奴もあつたもんだ……と頻りに感心して居たが側に居た老人に　正「今の和尚は何處の者ですか此邊の寺にでも居るんですか大總なる力のある人ですナ　老人「那の和尚さんですか那は廓然と云つて播州三木の豪傑別所小三郎の孫だと云ふ事デキ此先きの妙見寺に居る住職で侍座います」と云つて其儘立去つた正雪は之を聞き何の道ア、云ふ豪傑は味方に引き入れて置かなければならんと思つたから夫々の手蔓を求め漸やく屋敷へ招んで甘く一味へ引き入れました夫れから云ふものは忠彌を始め百方力を盡し柴田三郎兵衛吉田初右衛門を始めとし江戸に居る浪人共は大略味方に引き入れ四五年の後に至りましては江戸にばかりも四五千人ばかり党類を得たとはナカ、太した勢で侍座います其内に遊説に出懸けて居つた金井加藤の両人も三年振りで歸つて來て連判狀を夫へ差出したから開ひ

て見ると之れ又味方の者五百人以上もありました併し江戸在住の者に比べて見ますと其數極めに少なう御座いますが就れも皆覺悟のある者ばかりすぐりにすぐつた者ばかりですから其外連判帖に連ならぬ者で約束した者だけでも極めて大數であつたと云ふ事最早之れにて人數も十二分に整ひましたから正雪も大に悦び厚く両人を勞らひ彌々事を起さんと密かに時節を窺ふ内寛永廿年にして正保と改元し政保は四年にして後慶安と改元し終に同年四月廿日三代將軍家光公他界になり魯骸は上野東叡山に葬り御世繼は館林宰相殿御乘込みになる年僅か十二才之れぞ四代將軍家綱公と申上る正雪之を聞いて時至れりと大に喜び翌廿一日より就れも病と稱して他行せず先勢揃の式を擧げんものと例の三勇士へ評議なし愈來る廿五日上野東叡山の鐘を合圖に夜の子刻より一味の者道灌山へ集ると云ふ大事件の起り次

席に詳しく言上いたします

第十二席

正雪は丸橋忠彌、金井民五郎、加藤市右衛門の三勇士を招き愈時節到來に付兎も角も一味の者勢揃ひの式を擧げんと云ふ事の打合せをいたし慶安四年四月二十五日夜の子刻を相圖に就れも道灌山へ集る五人或は十人忍び忍びに走せ集るもの其勢五千八百余人尤も其頃の道灌山と云つたら今のやうに開けては居りませんから此位の人數が集つたところで左して目立たやうな事もありますまい此人數を二百十七組に分ち整々堂々と扣へたり扨も總大將由井民郎之介橋正雪が其夜の打扮を見てあれば紫縮緬の拾小袖に紺綾子の野袴を穿ち赤地の錦に金糸を以つて菊水の紋縫たる陣羽織を着し紗の引立烏帽子を頂き鐵漿黒々と染なして

彼の金銀を鏤めたる菊水の陣刀を鐺高に佩き正面の床几に掛けたる有様は威風凜々四邊を拂ふばかり右手には黒綸子の袷小袖を一着なし緋の縞紬子の野袴を穿き白錦に金糸をもて紋散し縫たる陣羽織を着し白銀作りの大太刀に二尺六寸の拵添を帶し身の丈六尺有余寸色白にして髭青く態と髮を振乱して白綾の鉢巻したるは音に聞ねし副太將丸橋忠彌盛澄なり其外加藤、金井、柴田、熊谷、吉田、の五大將は青黄赤白黒の陣羽織を一着なし各左右に列なつたり其時大將正雪は金の采配を執つて下知を傳へるやう「先づ某しは千人を率ひ駿州に赴き近國の浪士を駆集め駿府の城を焼討して兵器兵粮を分取なし久能山に楯籠り宇都谷峠に塞つて出で西國勢を支ふ可し次に金井吉田の両士は五百人を引率なし大坂へ出發し最寄の浪士に令を傳へ大坂城を焼討ちし失れより京都の後詰をなす可し加藤熊谷の両士は五百人を率ひ京都

へ登り浪士を集め二條の城を攻落し直ちに天子の御供奉し比叡山に楯籠り將軍追討の宣旨を受く可し又丸橋忠彌殿には江戸表の惣大將となり上野の宮の御供をして柴田氏と諸共に日光山に籠る可し惣じて此度の戰ひには諸侯旗本等が公達を人質になす事肝要なり又五百人を遊軍とし地雷火に狼狽へ廻る諸侯旗本は小銃を以つて撰討に擊取る可し去れば名々忠勤に因つて名を揚げ家を興すこと既に近きに迫つたり復た某し案ずるに京大坂の四大將が各々彼地に若する日數と若しての上備へを立てると其日數を計算するに中二ヶ月の猶豫を取り來る七月廿六日夜の子の刻を合圖とし東西齊しく一戰を開かん此義何れも心得られよ」と一同に下知を傳へ本丸の方に向つて征矢一筋を放つ……之れで一先づ勢揃ひの式も終りましたから夜の明けぬ内にと次第々として腕を擦つて立歸る……明に立歸る孰れも勇氣凜々

る日になりまするとと正雪は兼て用意いたしたる軍用金を京大坂の四大將へ二萬両づゝ渡し何れも目立たぬ樣に立扮せ七人或は十人と上方を指して發足す正雪にも七月の廿一日別所廓然等の諸勇士を引き連れ江戸表發足に及び密かに駿府へ到きましたが茲に一ッの手違ひを起したと云ふは副將丸橋忠彌では座います

忠彌は軍用金として三萬両を受取りましたが心の中で考へた

「吾は江戸表の總大將となつたのに僅か三萬両位の金子では幸くも四五日の費用にしかならないト云つて正雪より申請けると云ふも一方の大將にありながら余まり氣量の無い咄しゝやア何しても自身調達致さんければ相成らん」と日頃の自負高慢の心よりして終に女房乙鶴の父なる弓師藤四郎を招きたる事にて

忠「實は某此度薩州樣へ抱へられ二千石の知行を下し置かれると の事日ならず屋敷も引き移るから何も多分の入費が嵩つて困却

致す就ては近頃氣の毒千萬の事乍ら暫らくの間二百金ばかり貸て呉れられまいか直に調達いたして返すから……」藤四郎も全たく左樣だと思ひましたからナニシロ娘の亭主が出世するんであつて見ればコンな嬉しい事はないと頻りに悦んで程なく二百金持參いたし呉れました

藤「忠彌樣之れは俺が知人の米屋へ家質を置き借て來た金子返濟の日限は來る七月十三日云ふ迄もない事だが何か間違ひなく返して下さい日限に違ひさへ仕なければ宜しから」と云つて此日は藤四郎早速に立歸つた忠彌は出來る丈の金策をなし種々と計略を巡らして目冷しき功名を致さんと或日の事江戸本丸の西南内櫻田辨慶堀の彼方へ參り先づ城攻めに第一番大切なるは暫の深みだと思ひましたから赤合羽に身を窶し雨の降るのを幸ひに笠皮笠を打被り十二分に泥酔したる体にて颯々浪々として參るは言はずと知れた何れかの屋敷の三

品が酒に喰ひ酔つた有様ですスルと怪しい者と見て取つたか一疋の黒犬がケタ〳〵まして吠へたて將に喰ひ付んとする程だ忠彌は後ろを振返りながら　忠「ヤイ畜生余り吠へて呉れるな假令件の事起り彼の八、人(八人は火の字なり)が勢ひ烈しくつて災ひ池魚に及ぼすと云ふ古事がある如何にもせよ家畜に及びし例を聞かず哮るが商賈でも斯ては余り五月蠅ぞや汝は良き犬じや默れエ、之ら默らぬか默らなければ之を喰へ……」と云ふより早く手頃の石を拾ひ取りハッタと打つ、所が如何した譯か石は外まして壑の中央へ落ちたが更らに水畑は立たず只小波の生ずるばかり丁度傘を開くやうな塩梅に水面に於て波紋を起すは之れぞ尤も深い處で浮座いまず兎角する内又吠へ懸る犬に再び打つたは今度は壑の水際に落ちました處からサッと水畑が立ち水の沸りますは之れぞ浅瀬で浮座います忠彌は此有様を見て瞬もせず見て居り頻りに何か點首て居りますが忽ち思ふ處ありと見ればイザ歸らんと不圖紛ろを振り返つて見まするとコハ如何にイツか自分の後に泰然として傘を差し懸け佇み玉ふ一人の貴人……忠彌は大に慌き疵持つ足の其儘手持無沙汰に酔に紛らし日々谷の方へと狐鼠々々と走り、去りました斯る處へ浮旗本の天野彌五右衛門が來懸り忠彌は生憎此者に出逢つた出で……　忠「イヤ一寸用事があつて芝口まで……免……」と云ひ様バラ〳〵と蒐け出しました此貴人は誰あらう之れぞ當時賢明の聞ゑ高き松平伊豆守では座います彌五右衛門は再び、パッタリ伊豆守に出逢しましたから供をも連れず只一人お歩ひで居るとは不思儀な譯だと思ひますと伊豆守は聲を懸けられ　伊「彌五右衛門〳〵……　彌「ハヽア……　伊「彼れは何者じやイヤサ今其方と出逢つた奴は何者じや　彌「浮意に浮座います那の者

は本郷に弓町に實藏院槍術の指南を致して居る丸橋忠彌とゞは……

伊「ホー左様か……」と仰せられしまゝ更に何とも仰せられず見付の方へ向って

伊「コラ〳〵参れよ……」と差招けば忽ち夥多の供人が駕籠を持つて側へ参る伊豆守は之れに召して槍を立て本丸の内へと入らせられた斯う云ふ譯で丸橋忠彌は頭り

に兵の悪引に就て考へる處がありましたがソウコウする内彼の弓師藤四郎の方から借りた二百両の返濟期限と相成りました殊に家賃の事でゆ座いますから金子調達が出來なければ家を渡せと云ふ退引ならぬ催促

藤「エヽ忌々しい奴だ已れ忠彌奴約束に背くなと那れ程念を押して置いたに今になつて斯な迷惑を掛ける」

藤「夫は往ねい忠は悪くい奴」と烈火の如くに憤り忠彌の宅へ参り我子と思へば遠慮もなく乙輪に向ひ種々と忠彌の不義理をならべ立て盛を叫いて談じて居る折から忠彌も他出先きより歸つて來て怒れる

藤四郎を宥め

彌「全く拙者の手元不融通の爲め斯な不始末を惹け何共ア譯はゆ座いません平に容赦を……

藤「夫は往ねい忠彌殿お前も一体薩州様へお抱へになるの何のと云つて未だに往く様子も見えず、デはなんだな俺をだまして金子を借りたんだらうな……

忠「之は怪しからん事を……

藤「イヤ夫れに違ひなかう……」と昔し堅氣に一旦怒つては中々藤四郎も跡へ引かない元來短氣の忠彌は最早堪へ兼ね

忠「ソウ云はれりやア仕方かないマア暫らく待つて下さい……と立つて用簞笥の曳出しより取り出したる連判帖藤四郎は訝かしげに打開き見れば

コハ如何は紛ふ方なき謀叛の連判、中にも音に聞いた彼の正雪を始めとし忠彌は更なり夥多浪士の面々次第正しく記き載せてある藤四郎は之を見るより赤くなり青くなり恰で七面鳥の怪物みたいだが暫らく默然として居ましたけれを之を見は一刻も猶豫は出來ない何

を云ふにも娘乙輪の身にも祟りのある事去らば訴人いたして北効を持つて娘丈も助けやうと悉皆腹が極つて仕舞つた、ケレども色にも顯はさず赤面の体にて忠彌の前に恭々しく禮を述べ　藤斯る大氣量のある和殿とも存せず金の催促して青筋立てたは我ながら實に大人氣なく愚かの至り夫れでは事の成就した後綏々返濟をなさい」と言はれて忠彌も喜こび其日は夫れで歸つて仕舞つたが素より藤四郎は腹の定つて居る事ですから直ぐ其足で松平伊豆守の屋敷へ駈け込んだ　藤「天下の一大事で御座います至急目通りを願ひます」取次の者も藤四郎が面色を變て來たんで不思議に思つたが早速奥へ此事を申上ると伊豆守は何か心中に御考へ遊ばされ　伊「イヤ苦しうない庭へ通せ」之から藤四郎は庭口より武士の案内に連れて通り讃んで頭を下げる伊豆守は端近く進まれ　伊「やをれ藤四郎訴へ出たる天下の一大事とは何事だ疾く

此場にて申聞い　藤「左樣では座います某の娘乙輪の婿に丸橋忠彌と申す槍術の指南者が御座います處が彼れ由井正雪等と相謀り明後廿六日を以つて謀叛の旗を揚げると申すこと私は既に逃到帖まで見て參りましたが之が天下の一大事でなくては外に一大事はあるまいと夫れでお訴へ申しました去り乍ら訴へ出るからには藤四郎一ッの願ひが御座います　伊「ウム何じや其願ひの筋とは……　藤「外では御座いません某の娘乙輪の命は訴人の効を以つて父の藤四郎に下さる樣御陰仰ぎ奉る」と恐る〳〵願ひました伊豆守は忠彌と聞いて扨は此間暫の深み淺みを試したる彼れの擧動夫れや之れやを思ひ合すれば決して僞りはあるまいと藤四郎に向ひ　伊「夫は容易ならざる一大事若し其方の訴へがなければ當江戸表に住居する幾千万の人をも難義致させなければならぬ神妙の至りだ其方の訴は伊豆守胆に銘じ深く殊勝に存

する左り乍ら乙輪とやらは假令其方の娘なりとも忠彌の妻とあるからは私しには助け難し去れや伊豆守心に思ふ仔細もあれば兎も角もして取らせん其方は之れより町奉行の石谷が屋敷へいそぎ參り忠彌召捕りの案内をいたせ斯いふ内も心が急く訴人太義」と云ひ捨て其儘登城いたされた之れから松平伊豆守は先づ大老酒井讃岐守へ件の變事の一伍一什を演べられた處讃岐の守なにも大に驚き玉ひ之より急布令に及び「將軍家俄急病なれば早刻登城あるべし」と云ふので使を八方に奔らせ水戸中納言を始めとして夥多の諸侯登城に相成るソコで讃岐守より實は之々云々と正雪忠彌等謀叛手配りの一條を述べられたので何れも容易ならざる一大事と呆るゝ外はない茲に水戸中納言は泰然として變事鎮定の義を伊豆守にお任に相成る伊豆守肺肝を碎かるゝの件りより正雪等一味の者召捕に相成るの話し次席に……

第十三席

伊豆守は之より早速召捕りの手配りを致され先ず監察駒井右京之進へ旅籠飯高七郎兵衛を差添られ徒士四十余人同心三百人を引率せしめ首領正雪の討手として其夜直ちに驗府に向はせ次に諸代の諸侯方には門々の木戸を鎖し弓鎖砲を以つて堅めさせ又町奉行石谷右近將監を召出され丸橋忠彌を召捕る可しとの嚴命右近將監は畏りて直に與力同心を集め捕手の用意を整へられ先第一番には馬籠彌五右衛門二番は間嶋忠藏三番は遠藤文六遠見新右衛門の両人と相定め又石谷の家に傳へられたる八方鈴卿隱と云ふ鷄卵の殼に爆裂藥を仕込みたる目潰を用意させ高張提灯を夥多照らさせ弓師藤四郎をば案内に立てさせ其夜戌の下刻よりして本郷御弓町へと打向はせ丸橋忠彌の屋敷をば前

後左右より徐々と取巻きたり斯る事とは神ならぬ身の知る由も
なく忠彌は例の金才角にアチコチと奔走いたし点火頃に漸く歸
つて參りました大方軍用金も整ひましたから先づ心祝ひとして
夕飯に一升五合ばかりの酒をあはり付け嚥て臥床に入ると間も
なく斫の聲は雷の如くで傍座いますす斯くて亥の刻とも思ふ頃誰
れとも知らず掛矢を以つて前後の門をば打破り

×「火事だ……

火事だ……と呼ばはりながら吶と叫んで亂入に及ぶ元來忠彌の
宅には兼てより屈強の浪士九十余人と云ふ者は毎日立籠つて居
りますが最早生死の程も今日明日と云ふ際ぎひ場合になつて參
りましたに依り此夜は悉く廓へ遊びに參り一人も居合はしませ
ん……之れぞ全く運命の盡くる處でば座いましやう去れば忠彌
もお神酒の廻つた加減で前後も知らず熟睡いたして居た處へ此
噪ぎでは座いますから忽ちガバと飛起き枕刀を取るより早く

忠「火事は何所だ……火事と云ふは何れである……と何心なく立
出でて見る一番の捕手馬籠彌五右衛門彌「忠彌彌用だ神妙に致
せ……と聲を懸け乍ら組付かんとする打驚きたる丸橋忠彌忠
心得たり……と云せも敢へず左の足にて丁と蹴るナニシロ名う
ての武藝者に蹴られたんだから堪らない三間ばかり蹴飛ばされ
肋骨三枚ぶち折つて彌「アッ……と言ひさま即死いたす二番に
眞嶋忠藏忠「上意……上意……と聲を懸け飛蒐つて來る忠彌は
右手に掻掴み撞と投付け起んとする處を起しも遣らず拔打に細
首丁と聲落しました此有樣に遠藤逸見も進み兼ねて居る此時忠
彌は聲を振り立て忠「ヤア何者なれば理不盡にも犯したる罪も
なきに繩を掛けんと致すか繩を受ける覺ゑはないぞ……」と云は
せも果てず遠藤文六文六「愚なり丸橋忠彌汝が男藤四郎より伊
豆守に訴へ出で隱謀詳かに露顯いたしたり、いざ尋常に繩にかゝ

れと云ひつゝ跡を見返へれば捕手の中より藤四郎涙に睫を泣きはらし藤四「忠彌殿よ今更らと相成つては甲斐なき事我れ故あつて訴人したれど兎ても角ても脱れぬ命せめては神妙にお縄を受けられよ」と聞き及んだる忠彌に於ては大力ギラリと取直し怒れる面色恰然惡鬼の如く腸を斷つ遺恨の形想

忠「ヤア俺れ人非人の藤四郎仮令如何なる事あるとも現在我子に かゝる緑の某を訴人に及ぶとは虎狼に増たる人でなし奴斯く相成る上は男となりとてヤミ〳〵と生し置んや恨みの刃思ひ知れ」と云ふ言葉も未だ了らぬに後ろの方にて女「ノウ忠彌どの父上が非道の訴人最早恨んでも甲斐なき事親の心は大略察しては居るなれど現在夫が此有様を知らず顔しては居られまい共に覺悟は極めましたイデ妾が寸志を御覽遊ばせ味方の人の後をくらまさん」と忠彌が側の火鉢の中へと投込む連剣帖、パッと立つ烟と共に燃ね上る忠彌は

此有様を佶と見て取り

忠「ヤア出かした女房乙輪今は少も躊躇はなしアラ心よや……アハヽヽ……と笑つて居る、今に自分は召し捕られやうと云ふのにカラ〳〵と笑つて居るとは實に大膽なものでゐ座います捕手の役人も此有様を見て……と烈しき下知に與力同心各ぞ十手を腰になし一度に刀を拔き連れ八方よりおつ取込め切つて蒐るをモノ〳〵しやと忠彌は太刀を振かぶり阿修羅大王の荒たる如く當るを幸ひ薙立て斬立て忽ち其處に四五十人と云ふ者を切倒しまじた夫れが爲め捕吏の人數も少し攻めあぐんで見たにより今は之れ迄と遠藤逸見が差圖に各々乃を投捨て用意の眼潰しを取るより早く四方八方より取圍んで雨霰の如くに投つくる件の目潰しは破裂をなし恰かも鐵砲の玉の如くで座いますから流石の忠彌も之れには閉口いたし眉間へ一ッ打ち附けられたのでグラ〳〵ッと眼が

暉み後ろへ撞と倒れましたを得たりと一度に走り蒐り折重つて刀を捻取り高手小手に縛しめました乙輪は忠彌の召捕られたる有様を見よりも父藤四郎が藤夫れ乙輪逃ろ……逃よ娘……と手を取つて引き出さんとする其手を振ひ忠彌が取り落したる刀を拾ひ取り忽ち咽喉へ差し貫ぬき敢なき最期を遂げたのは天晴れ貞女でゐ座います。爰に又正雪は慶安四年七月廿四日の朝駿河國府中へ着いたし梅屋掛兵衛方へ宿を定め上下十一人にて逗留いたし又一千余人の浪士をば由井與津鞠子岡部の村々宿々へ潜ませ置き翌廿五日の夜に至り忍びやかに府中に集り廿六日の夜の子の刻に相成らば駿府六十六ケ町を一時に焼立て城番の武器兵粮を奪ひ取り久能山へ楯籠り宇都谷嶺は一騎打の難所で陣座いますれば彼所には柵を搆へ西國勢を防ぐと云ふ其手筈はスツカリ定て仕舞ひ其晩は酒宴を催しまして詩を吟じたり歌を

咏だりいたし一同十二分の酔を發し蟠て臥床に這入りましたスルと翌る日になりますと午の刻少し下る頃江戸の板木坂の屋敷を守らせてある坪内左司馬唯一人急遽しく尋ねて參り正雪に急々對面に及びます正雪も左司馬の面色只ならぬに不審を起し正左司馬何か急な用事でも出來たのか若しや忠彌が手違ひでも出かしは致さんか左仰せまでもなく大事は全く破れたり事の仔細は詳かならねども丸橋殿が妻乙輪の父なる弓師藤四郎が訴人いたし隠謀既に露顕に及び昨夜忠彌は召捕られました因つて某し昨夜より汗馬に鞭を當て宙を飛ばして只今到着におよびして陣座います」と云ふさへ喘ぎ〳〵申述ましたのですから正雪も之には驚きましたが只目と目とを見合す斗り此時廓然坊は進み出で「廓モー斯く相成つては如何んとも致し方がありませんと急き諸浪士へ命令を傳へ先づ駿府の城を攻め落さんサア陣猶豫

なし玉ふな一刻を誤まれば一大事……」と云ひつゝ既に此場を立ち
んとするを正雪は暫しと押止め　正「廓然坊夫れは余り大人氣な
き事元來此度の企てとゆすは江戸駿府を始めとし京大坂まで一
時に燒立て日本國中を手に入れんと思ひ定めしに今更ら二千三
千の者を集め獨り當所に戰を起したところで仮令二ケ國三ケ國
を手に入れたところで斯く謀が齟齬したならば應援の道も絶へ
不意を擊つ可き利を失ひ終に本意も遂げ難し寔に二十余年の大
望一時にうたかたの泡と消ゆるとも之れ又天なり命なり我事既
に終る故此上は唯潔ぎよく自殺するより外はない去り乍ら各々
方は敢へて犬死す可きにもあらず早く此處を遁れ出で時節を俟
つて身を立てられよ……サ疾く此場を落のび玉ひ早く早く……
と急き立てます併し此處へ來つて居る人々は何れも一騎當千の
もの一旦生死を共にしやうと云つた上は飽まで死のうと云ふ風

見ですから落ちろと云つても中々遁げ去る氣色はなく　○「之は
大將の下知とも覺ねざる事抑も某等一同は此大望に加はり
より義を泰山の重きに置き命を鴻毛の輕きに比べ死生を共にせ
ん事を誓ひしに此期に及び誰れか一人落ち行く可き女々しき事
を宜まはずイザ出陣の用意を」と覺悟定めて異口同音に答へま
したから正雪も此勇ましき一同の返答を承はり數回歎息に及び
正「死すべき時に死せざれば死に勝る恥あると云ふあたら勇士を
やみ〳〵と我れ一人の爲めに殺すこと實に心苦しき限なる故に
斯は自殺を止めたなれど各々の志鉄石にも勝る勝氣丈……去ら
ば諸共に生害を致さんとは言へまだ急ぐ場合に非ず筠と城代の
詮議を見て心靜かに自殺を致さん各々方も左樣思召すやうに……
……」と之から正雪は宿の小者に命つけて鏈二百挺と麻繩の細引き
數百本を買求めさせ次に主人勘兵衛を呼びまして　正「扨勝主人

不思議な縁を以て拙介になつたが仔細あつて今日此處にて自殺致さねば相成らん夫れ故座敷を汚すけれども之れも時の不運と思ひて諦めて呉れよ――……

正「就ては茲に黄金三千両之れは座敷の汚れを掃除いたす掃除料だ

勘「へエー……夫れでは腹をお切んなさるんで……

正「左様仔細あつて切腹いたさねば相成らんだ

勘「貴郎お一人で……

正「イヤ茲に扣へて居る者一同じや

勘「詰らねい事をなさるもんですな就れも江戸のお客様であり乍ら態々駿府まで出でになつて夫れじやア男同士の情死だ

正「馬鹿をヤせ何でも宜からよろしく頼むぞ

勘「何もよんどころ御座いません見込まれたが因果だ

正「夫れからモ一ッみがある……と取出したは兼て楠不傳より譲り受けたる三種の寶物夫れに黄金五千両を相添へ

正「之れは拙者の師匠楠不傳の娘小万尼に當時鎌倉の松葉ケ谷なる尼寺に住居れるが之れへ届

けて呉れソレで我亡きあとをも吊はれるやうくれぐも頼む

勘「委細承知いたした……と心易く受合ひましたので正雪も大に安心いたし先づ酒肴を連ね今度てはいよ〳〵名殘りの酒宴故心靜かに盞をめぐらし城代來れと待かけて居る。此方は江戸表に於きましては御監察駒井右京之進急使の駕籠を飛して今朝未明に城内に走せ入り御城代大久保玄蕃頭へ伺老中の奉書を渡し且ツ正雪等謀叛の義箇樣々々と傳へたる事故玄蕃頭も大に驚き斯ては猶豫相成らずと先づ手配りとして江戸入口は秋田安房守阿部川口は石田藤五郎其外柳原起中守常木金右衛門等各四五百人の手勢を引き連れ尚は諸方の間道を固めたる事にて旅宿の亭主を殘らず呼あげ逗留の客を尋ねに及ぶ然る處梅屋勘兵衛方に正雪始め同志の者集り居ると云ふ事が知れましたから去ばと手配りに及びました、ケレども何を云ふ

に、も稀代の英雄ですから迂闊に手、出しは出來ない夫れ故玄蕃頭は計略を設け、町奉行所の門内へ屈強の同心八十人を伏せ置き正雪が參つたら不意に起つて生捕らんと其手配りを定め置き扨城代玄蕃頭は與力同心三百人を從へ梅屋勘兵衛の家の周圍を森々と取圍み玄蕃頭は勘兵衛を呼出し　蕃「勘兵衛其方も既に承知ならんが當家に逗留の客人にて由井正雪と申す者が居る筈面談いたしたき事あつて城代自ら出張いたしたる此旨申傳へられよ」と最嚴重に申渡す勘兵衛は心得て急ぎ正雪に此旨を申傳へられますと正雪は扨こそ遣て參つたなと思つたから　正「然らば後刻面會いたす故一旦は引取り下さるとも其儘お待ち下さるとも夫れは偽隨意我々は唯今食事をいたし仕度を整へしへば速にお面會申す故宜しく申上て呉れ」と一旦勘兵衛をは引き取らせ一同の者に向ひ

正「扨は一同最早城代自ら出張に相成つたる樣子然ら

ば切腹の用意を致さん」と床の間には鎧櫃を据置き髪を梳り身を清め各々衣服を改めて藉物の上に泰然と坐し春霞と云ふ名香を焚き正雪は先諸肌押ぬき短刀の鞘を拂つて右手に取り左手に腹を撫でながら靜かに左右の者を見返り　正「人は最後の一念によつて善惡の性を引くとかや人生五十七十は古來稀なり況んや百年を保つを得ず仮令北州の千年も終には盡くる時のあるもの寔に今生は夢幻の如し人の事又親族の事を思へば嘆息の至りなれど此期に及んで何をか演ぶる所あらん廓然は出家の身佛に結縁あるもの去らば介錯を頼むと云ひ了り暫らく目を閉ぢて頻りに何事か考へて居る　正「イヤ各一首の辭世が出來た……とスラ〳〵と認めました

秋は只なれし世にさへ物憂を
しらぬ旅路に首途する身は